



言葉にすれば、

世界を動かす力になる！

< JICA九州 > [国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2017作品集](#)

[独立行政法人国際協力機構 九州国際センター](#)



ご応募いただいた皆様に感謝を。

国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

独立行政法人国際協力機構（JICA）が開催するエッセイコンテストにご応募いただいた皆様、ありがとうございました。

また、この資料作成のために取材にご協力いただいた皆様に感謝いたします。

この資料は、JICAが2017年度に実施した「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」において、九州の学校から届いた応募作品の中から18の受賞作品を掲載したものです。また、受賞者やご担当いただいた先生方に、応募の背景をうかがったインタビューやコメントを掲載しています。今後、応募をお考えの皆様のご参考になれば幸いです。

JICA九州では、開発教育支援事業を行っております。エッセイコンテストとあわせてご活用ください。

[国際協力出前講座](#)／[九州国際センター訪問](#)／[高校生国際協力実体験プログラム](#)／[民族衣装と資料貸出](#)／

[国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト](#)／[教師海外研修](#)／[研修員との交流プログラム](#)／[海外のJICA事業現場を訪問](#)



index

インタビュー

- 👤 [松尾桜子さんと佐藤高行先生／明治学園高等学校](#)
- 👤 [井上優さんと渡邊久美子先生／八代高等学校](#)
- 👤 [川江芽生さんと瀧野公之先生／平松学園向陽中学校](#)
- 👤 [御厨美月さんと太田綾実先生／大村市立郡中学校](#)

コメント

- 👤 [所長賞／福岡県 中村学園女子中学校 ヤンケ真弓さん 沖野寛之先生](#)
- 👤 [所長賞／佐賀県 佐賀学園成穎中学校 ナビハ カーンさん 筒井ゆう子先生](#)
- 👤 [所長賞／熊本県 熊本学園大学付属中学校 永濱日菜さん 山住洋平先生](#)
- 👤 [所長賞／宮崎県 宮崎市立住吉中学校 日高沙祐さん 渡邊由美子先生](#)
- 👤 [所長賞／鹿児島県 学校法人神村学園中等部 得永美潤さん 石田尚子先生](#)
- 👤 [審査員特別賞／宮崎県 学校法人宮崎日本大学学園 宮崎日本大学中学校 岩元咲和さん 江川智子先生](#)
- 👤 [優秀賞／鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属中学校 前田葵さんとお母さまの聡子様](#)
- 👤 [所長賞／佐賀県 早稲田大学系属早稲田佐賀高等学校 佐伯知香さん 原政幸先生](#)
- 👤 [所長賞／長崎県 長崎市立長崎商業高等学校 田中未夢さん 小嶺博子先生](#)
- 👤 [所長賞／大分県 学校法人平松学園大分東明高等学校 河野美紀さん 後藤典子先生](#)
- 👤 [所長賞／宮崎県 学校法人宮崎日本大学学園 宮崎日本大学高等学校 北崎桜花さん 樺山和美先生](#)
- 👤 [所長賞／鹿児島県 鹿児島県立鶴丸高等学校 田代紗彩さん 武富幸司先生](#)
- 👤 [国際協力特別賞 福岡県 福岡県立修猷館高等学校 ラワンチャイクン茉莉さん 豊田恵先生](#)
- 👤 [国際協力特別賞 宮崎県 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 遠目塚優さん 東口匡樹先生](#)

*お願い:この資料にある文章・画像等の無断転載はご遠慮ください。



index

作品介绍

🌐内面をみる

[中学生の部 所長賞 福岡県／中村学園女子中学校 ヤンケ真弓さん](#)

🌐私の母国

[中学生の部 所長賞 佐賀県／成瀬中学校 カーン ナビハさん](#)

🌐小さな私にできること

[中学生の部 所長賞 長崎県／大村市立郡中学校 御厨美月さん](#)

🌐身近な所から

[中学生の部 所長賞 熊本県／熊本学園大学付属中学校 永濱日菜さん](#)

🌐小さなことが誰かのために

[中学生の部 所長賞 大分県／平松学園向陽中学校 川江芽生さん](#)

🌐国際協力について考える

[中学生の部 所長賞 宮崎県／宮崎市立住吉中学校 日高沙祐さん](#)

🌐共に生きる

[中学生の部 所長賞 鹿児島県／神村学園中等部 得永美潤さん](#)

🌐「This is our culture, that is your culture.」

[～異文化理解で守る、世界平和と人々の誇り～ \(本部表彰対象\)](#)

[中学生の部 優秀賞 鹿児島県／鹿児島大学教育学部附属中学校 前田葵さん](#)

🌐みんなが一つになれば (本部表彰対象)

[中学生の部 審査員特別賞 宮崎県／宮崎日本大学中学校 岩本咲和さん](#)

🌐高校生の私たちができること

[高校生の部 所長賞 福岡県／明治学園高等学校 松尾桜子さん](#)

🌐笑顔

[高校生の部 所長賞 佐賀県／早稲田佐賀高等学校 佐伯知香さん](#)

🌐世界の人々と共に生きる

[高校生の部 所長賞 長崎県／長崎市立長崎商業高等学校 田中未夢さん](#)

🌐映画配達人になりたい!

[高校生の部 所長賞 熊本県／熊本県立八代高等学校 井上優さん](#)

🌐人々の態度

[高校生の部 所長賞 大分県／大分東明高等学校 河野美紀さん](#)

🌐発展途上国の看護を考える

[高校生の部 所長賞 宮崎県／宮崎日本大学高等学校 北崎桜花さん](#)

🌐異文化理解とは

[高校生の部 所長賞 鹿児島県／鹿児島県立鶴丸高等学校 田代紗彩さん](#)

🌐バングラデシュの少女に向けて (本部表彰対象)

[高校生の部 国際協力特別賞 福岡県／福岡県立修猷館高等学校 ラワンチャイクン茉莉さん](#)

🌐地域の色を守る (本部表彰対象)

[高校生の部 国際協力特別賞 宮崎県／宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 遠目塚優さん](#)

*お願い:この資料にある文章・画像等の無断転載はご遠慮ください。



Hello!

松尾桜子さん

明治学園高等学校／福岡県北九州市

高校生の部 **所長賞**

最初に知ることをしないと。

例えば、偏見から間違った行動が生まれることもあると思います。

アメリカでも学びましたが、

まず知らないと何もできないですし、

知ることによって行動ができると思います。



JICAデスク福岡の森川大毅とJICA九州・市民参加協力課の飯野純子が

明治学園高等学校で、所長賞受賞者の松尾桜子さん、そして、佐藤高行先生にお話をうかがいました。



interview

正直なことを言うと、夏休みの宿題でした

森川.. 所長賞の受賞おめでとうございます。ありがとうございます。

松尾.. 私も作品を読ませてもらいました。実際に経験されていることや自分の考えもすっかり書かれていて、すばらしいなと感じました。最近、友達同士とか学校とか、または自分だけのブームとか流行っていることはありますか。

松尾.. ずっと海外に興味があつて、海外の文化が好きでYouTubeを見たり、洋楽を聞いたりしています。

飯野.. きっかけはなんですか。

松尾.. 小5のとき、オーストラリアに1週間ぐらいホームステイをしました。そのときは英語でコミュニケーションが全く取れずすごく悔しかったです。もっと勉強したい、知りたいという気持ちになりました。中学生になつて英語の勉強を始めてから少しずつ話せるようになって、部活のときに英語で意見交換できるようになったり、日本語が話せない人とコミュニケーションしたり、海外の人と関わるのが楽しくなりました。

森川.. 初めての海外だったのですか。

松尾.. その前にハワイに行きました。オーストラリアは別世界のように感じました。日本に帰ったら現実で感じ。楽しかった思い出しかないです。最近だとアメリカに行きました。アメリカはサイズが大きいなと思いました。それもよかったです、食べものを残している人を見たら、いいのかわいのかよく分からなくなりました。お店の人はフレンドリーで、自分から話しかけたら会話が続いて、そんな全く知らない人と会話ができるところは日本と違うと思いました。自分が体験してみてもよかったです。

森川.. 作品についてお聞きします。最初に応募のきっかけをお聞かせいただけたらと思うんですが。正直なことを言うと、夏休みの宿題でした。このコンテストについて調べていたら、いい賞を取ったら海外に行けると知り、それですごくやる気を持って取り組みました。夏休みの宿題だったとしても、自分が書くことによつて海外に行く機会がもらえるのならチャレンジしたいと思つて書きました。

森川.. 実際書いてみて心境などは変わりましたか。

松尾.. 最近よく将来のことについて考えています。私は自分からなにかをやりたいと思つていますが、書きながら自分がやつていっている活動についていまこんなに書けるんだから、もつと何かやりたいと思うようになりました。

やる意味がわからないとか、難しいとか……

森川.. 実際に書かれたなかで、印象に残っていることはありますか。

松尾.. ランドセルを回収(してアフリカに送った)したことについて書きましたが、中3のとき、同じ学校の24名でアメリカに行きました。このメンバーでランドセルを集める活動をやりたいと思ひ、みんなに相談しました。そのうち2名が反対して、その2名を説得するのが大変で、夜もいろいろ考えたり、泣いたりもしました。結局は説得できましたが、それがいまの自信につながっていると思います。

飯野.. 反対された理由は？

松尾.. やる意味がわからないとか難しいとか、今までやつたことがないからとか、そんな理由だったと思います。

森川.. その2人にはどう説得したんですか。

松尾.. まずなぜやりたいのかを聞き、私たちがやりたい理由も伝え、その後みんなで説得しました。最終的には乗り気ではなかったと思うけど、当日は協力してくれました。

森川.. 無事に終わつて、やりがいのようなのを感じたんですね。

松尾.. すごく感じました。ランドセルは私を中心になつて送る手続きなど全部しました。その後、この活動をしているジョイセフ(国際協力NGOのJOICFP)という団体から、ランドセル届きましたよという手紙をもらいました。送るまでもメールで何度もやり取りをしていたので、そのときはよかったです。アフリカからの贈り物ももらったりもして、いい関係が持てたなと思います。

森川.. その活動、行動した先に、感情の変化があつたということでしょうか。作品を通していけば伝えたかったことはどんなことですか。

松尾.. ランドセルを送る活動もそうですが、私たちがいまだにできることもあるということも伝えたかったです。私たちは大人にならないと国際的な活動ができないわけではなく、いまできることを少しずつでもやつていけたらいいと思いました。

森川.. 作品のなかで、知ることの大切さについて触れられていましたが？

松尾.. 最初に知ることしないと。例えば、偏見から間違つた行動が生まれることもあると思います。アメリカでも学びましたが、まず知らないと何もできないですし、知ることによつて行動ができ

Interviewer: 森川大毅 / 福岡県国際協力推進員

青年海外協力隊員として小学校教育のためにパナマツに行ってきました！日本の外との繋がりを意識するだけで、海外の現状を知るだけで、今いる自分が見える世界が変わってくると思います。一歩踏み出して、国際貢献してみませんか？少しでも世界に興味を持った方は、ぜひ気軽にJICAデスク福岡に立ち寄ってみてください。

必ず見える世界が広がるはず！ JICAデスク福岡 <https://www.jica.go.jp/kyushu/pref/fukuoka.html>



森川.. ニュースとかメディアとか見ている？
 そうですね。私はアメリカとかが好きで、アジアにあまり興味なくて、どちらかというと悪いイメージを持っていました。その塾で私が活動したグループに韓国人の学生がいて、話してみたら私たちと一緒に！と思いました。日本のことが好きで、文化の話、芸能人の話もしたりして、私たちと考えていることは同じだなんて。いままで私が知らずにそういうイメージを持つていたのはいいことではないと思いました。だから知ることに、小さいことでも少しずつ知っていったらみんな仲良くなれるんじゃないかと思いました。

森川.. それは私も共感するところです。ニュースになっていること、実際に接してみたら違う、考えが変わるという点は私もすごく共感します。私も昨年3月までインドネシアにいましたが、実際にインドネシアの方は、私が持っていたイメージとは全く違っていました。松尾さんも作品のなかでイスラム教やI・S・I・Sの影響など書かれていましたね。

松尾.. 私のグループにはマレーシアの人もいて、イスラム教徒でした。一緒に意見交換したり、ご飯食べたりしながら、I・S・I・Sの影響もあつたんだと思いますが、私たちと違わないのになぜイスラム教徒のことを悪く言っていたんだろうと思いました。イスラム教徒の人に対して壁をあまり感じなくなりました。私も松尾さんと同じで、イスラム教といえませんがI・S・I・Sの過激なところばかり思い浮かんでいました。実際行ってみたらイスラム教は人を大切にする基本的なところを教えている宗教で、それが生活に根づいていて、何も怖いことではないと分かりました。日本にしていると、宗教的な場面に触れることは少ないので、実際に接してみることは大事ですね。

知る機会を与える人になりたい！

森川.. 次に、将来の夢、先ほどソーシャルビジネスをやりたいと話してくれましたが、具体的には…

松尾.. 知ることを小さいうちに身につけられるような、例えば海外でも壁を感じないようにしておけば、大人になってからも壁を感じることなく世界が良い方向に動いていくんじゃないかと思います。知る「機会を与える人になりたいです。もちろん、現地での活動にも興味があります。

森川.. まだ1年生なので学生時代にできることもあると思うんですが、もし今のうちに「こんなことをしたい、こんなことに向けてしておきたい」とはありますか。

松尾.. さっき言ったとおり、いちばん大事なのは「知る」ことです。自分が知ったことを周りに少しでも伝えることも大事だと思うので、続けていきたいです。ランドセルを送る活動も後輩に引き継ぎたいです。

先生.. ソーシャルビジネスのコンテストや学会などがあるので、来年うまく研究が進めば、そういうところでも伝える機会はあるかと思います。

飯野.. やりたいです！
 学校が情報提供していることもあると思いますが、松尾さんは常にアンテナを張っていますね。

松尾.. 自分がやりたいと思ったことはいまやっておかないと思うので、夏に参加した塾も学校にあったパンフレットを見て、これは新しいからやりたい、やらないといけない、それが自分の将来につながるかもしれないと思って参加しました。たくさんの方に興味を持ちたいと思っています。

森川.. 周りを引っ張っていきたいっていう思いがあるんですか。
 リーダーはリーダーシップを張るだけではなく、フォロワーシップを発揮しなければいけないと塾で聞きました。だから、私はみんなが協力してくれるような人になって一緒に進みたいという感じですか。



interview

飯野.. 作品はどのくらいで書きました？
 普通の作文だったら最初から原稿用紙に書くんですけど、でも今回は構成等を考えて、下書きして書きました。ほかの宿題はやらず、2〜3日くらいエッセイだけに集中して取り組みました。

飯野.. 作品に思いがこもってるんですね。
 私たちとしてもありがたいですね。

森川.. 私は1人で行ったんですか。学校単位での申込ですか。
 自分からまずやりたいと伝えました。学校から成績も出さないといけないので、しかも参加費がすごく高かったため、一度親に話したものの諦めていました。でも締め切りの直前に母が「やりたいって言ってたよね？」と、学校に電話して成績を出してもらって、私も休みの日に頑張って書類を書きました。学校からはこういうのがありますよと教えてくれたんですが、申込は個人的にしました。

先生.. 学校はいつも紹介するだけで、あとは本人たちに任せています。その次世代リーダー養成塾以外にもいろんな案内がありますが、学年主任に全部情報が集約された後、生徒に紹介するという形です。

森川.. 情報を得たときは、やっぱりピンときたんですか。
 やりたいなと思いました。もちろん、私はみんなと協力しながらやりたいと思いますが、多少は自分がこういうものに参加することも必要だと思っています。全国から高校生が集まるので、いろんな人と意見交換をしたかったし、参加してすごく良かったと思います。自分が本当に変わったと感じています。いままで過ごした夏休みでいちばん楽しくて、辛いときもありましたが、すごい濃い2週間でした。

森川.. 将来が本当に楽しみですね。今日はお忙しいなかありがとうございました。
 ありがとうございます。

松尾.. ありがとうございます。



Thanks!



Hello!

井上優さん

熊本県立八代高等学校／熊本県八代市
高校生の部 **所長賞**

ずっと踊っているだけの映画なのに、ずっと泣いていました。
その時、すごく疲れていたのかもしれませんが・・・
この映画の何かに惹かれたというか・・・
パワーを誰かに**伝えたい**という思いが初めて生まれました。



JICAデスク熊本の阿南栄子とJICA九州・市民参加協力課の飯野純子が

八代高等学校で、所長賞受賞者の井上優さん、そして、渡邊久美子先生にお話をうかがいました。



interview

「このすばらしい経験をみんな気づいてほしいな」と思っています！

阿南 受賞おめでとうございます。ありがとうございます。

阿南 八代高校さんからは他の学年も応募されていますか。

井上 1学年を対象に、まずこちらで3つほどのコンクールを選びました。生徒自身がこの夏に体験したこと等をもとにして、いちばん書きやすいものを選んで作品を書くようにしました。国際関係や世界を見てという体験や考え方をした生徒はJICAのエッセイコンテストを選び、それ以外にも自分の将来のことを考えるとか、自分の身近な社会の問題を考えたりとか、そういうテーマで生徒自身が各自選んで書いています。エッセイコンテストは最初から選ぶほうと決めていて、生徒に書かせる前に優秀作品を読ませました。優秀作品は生徒が身近なところから考へたり、自分の経験をもとにして、知ったことから行動につなげていきたいと書いたりしていることが多いので、読むだけでも世界が広がる、視野が広がる感じがしたので、3つのなかのひとつにしたいと考えていました。まずみんなで授業時間に受賞作品を読んで、こういうことを書きたいねというのと、こんな高校生になつていきたいねとも伝えました。また、夏にグローバルアクションプログラムという、なにか自主的にチャレンジした自分の体験を書いてみようというねらいもありました。ですが、彼女の場合は私たちがそのような環境を作らなくても、すでにやりたいことがいっぱいあつて、最初からチャレンジすることも決まっていたので、それをそのまま素直にまっすぐ書いたのではないかと思います。

阿南 そうですね。井上さんの作品を読ませていただきましたが、思いがぶれないというか、そういうところが心を打ったのかなと思います。先ほど出たグローバルアクションプログラムとは？本校の方針なのですが、世界に目を向けよう、そして行動に移そうと3つのプログラムがあります。グローバルアクションプログラムには自分から世界に出て何かをつかんでみようというプログラムです。JICAの出前講座で来ていただいたものは、知の触発プログラムといって、知をこちらから提供して生徒を刺激をしていくというプログラム。最後がグローバルリーダープログラムといって、自分が見つけた課題をしっかり調査研究していくというものです。その3つのうちひとつのアクションプログラムでした。

阿南 自分が高校のときに、そういうプログラムがあればよかったですと思います。

井上 私も思います。このすばらしさをみんな気づいていないと思います。私が言うのもなんですが、生徒が外に出ていく率も高いし、遠いです。どんどん出ていきます。

生徒の自主性、地域創生の礎

阿南 国際協力に興味があつて、自分で何かをやってみようと実際に活動している生徒さんはいらつしゃいますか。

先生 JRC(青年赤十字活動)では、割といろいろやっています。みんな自由に企画を持ってきて、生徒の自主企画で講師の先生をお呼びするとか、世代を超えた交流、戦争と平和について語るうというところで、今度90歳の方も来てくださいます。内容だけではなく、お願いしに行くのも自分たちでやっています。そういう意味では、国際協力というよりも学校の外でいろんな人とながりがりながら何かをやっているところがあります。外にながらうと意識的にやる子も多いですし、それに協力する子たちもいます。先日の出前授業のときも、私が調整するより生徒に呼びかけをしたら集まりました。今度3月のはじめにはアフタースクールといって、自治会(生徒会)が八代の街の活性化のためアフタースクールをやるろうと企画をして、街の人たちを巻き込んで、それぞれがそれぞれにやりたいことをやっていますね。

阿南 いま、大学が地域創生、地方創生とか言っていますが、その礎が高校でできているのですね。あなたがいまやっていることを話したら？

井上 それはいつ行ったのですか？

阿南 去年、高1の夏です。その前、中3のときに熊本青少年大使(グローバルジュニアドリム事業)として台湾に1週間行ったのが初海外で、そこで海外に目覚めました。それから自分は何がしたいのか考えていて、そのときにたまたま「ビタテ！留学JAPAN」に出会いました。先生方に試験対策していただいて、頑張つて受かりました。「ビタテ！留学JAPAN」は日本全国の面白い学生が集まるので、誰と話しても楽しいです。私が映画の活動をやっていると話すと、関連情報を教えてくれる友達がたくさんいます。

阿南 中3のときの熊本青少年大使で派遣された台湾で目覚めた。台湾は親日国家で、みんなとても優しくはい。台湾では1週間滞在ホームステイをしました。台湾は親日国家で、みんなとても優しくしてくれました。そこで台湾がすごく好きと感じたのがきっかけだと思います。日本のことを好きだということは、日本人もいい人なんだと思いました。もともと人が好きなんです。

Interviewer: 阿南栄子／熊本県国際協力推進員

青年海外協力隊員として感染症対策のためにニジェルに行ってきました！青年海外協力隊にいきいたい、学校で生徒に「国際協力」についてお話ししてほしい、企業で海外に市場を広めたい、外国に研修に行かせたい、受け入れたい、NGO・NPOとして国際協力に関わりたい、、、などなどみなさんの質問・考えやアイデア、行動を次の広い世界につなげていきましょう！JICAデスク熊本 <https://www.jica.go.jp/kyushu/pref/kumamoto.html>



先生.. 人が好きという思いが強くなっていったのも、この体験があったからだよね。トビタテ！留学JAPAN」に参加して、その気持ちさがさらに強くなった。

今まで学校のなかでしか動いていなかったから、日本の面白い高校生にたくさん出会って、もっと外で活動した方が面白い経験ができるんじゃないかなって。留学中に出会ったワールドシアタープロジェクト(以下WTP)」という、映画を開発途上国の子どもたちに届けようというNGOにユースの集まりがあるんですが、そこに入って九州支部を設立しました。まだ実際には何も起こせていません。WTPはカンボジアに拠点があるんですが、今年の夏に私の知り合いと一緒にカンボジアに行って、映画を子どもたちに届けようと考えているので、私もドキュメンタリーを撮ろうかと思っています。楽しみです。

初めて生まれた気持ち このパワーを誰かに伝えたい！

阿南.. トビタテ！留学JAPAN」に参加する前から映画には興味があった？

井上.. 小さいころから映画を観るのが好きだったんですが、中2のときくらいに映画が好きだと自覚しました。映画の仕事はやめられない』という本だったと思いますが、トビタテ！留学JAPAN」の試験を受ける前に読んで、映画のことをすごく考えたんです。このタイミングだったので、やっぱり私は映画だなと思います。

阿南.. ちなみに好きな映画は？印象に残った映画とか？

井上.. 人に観てほしいと伝えるならば、インド映画『きつとくまくいく』(Kiddo)です。3時間ぐらいですが、すごく長いですが、皆に薦めます。私はインド映画というかミュージカル映画のようなものがとても好きです。これがきっかけで映画の世界に行こうと決めたように思います。ずっと踊っているだけの映画なのに、ずっと泣いていました。そのときすごく疲れたいたのかもかもしれませんが、この映画のなかに惹かれたというか、..パワーを誰かに伝えたいという思いが初めて生まれました。この映画がいちばんです。

先生.. なにかに出会ったとき「これ好きだったんだ」と自分の気持ちに気づいたり、なにかを書くときにまず整理しようと考えたり、よくうちに分らなかったことが明確になったり..やはり本物の体験です。よく大きなこの子どもたちの話を聞いていて思います。あと、彼女は中学生にも話すんだよね。

井上.. そうなんです。この間、八代中の3年生に夢や外に出ることをテーマに、海外での経験をもとに高校生になるといような体験ができるという話をしました。高校生活には恋愛とか勉強だけじゃない、色んな楽しさがあることを伝えたいかったです。みんなつまらなくて寝ると思いましたが、起きてくれました。

阿南.. それだけみんな興味があったんだと思います。いちばん身近な先輩です。

井上.. 終わったあと何人か質問にきてくれて、やってよかったなと思いました。私は話すことが好きなので、実は自分がいちばん楽しかったかもしれませぬ。

先生.. JICA九州には、別の4名が昨年夏の実体験プログラム(JICA九州高校生国際協力実体験プログラム)に参加して、その子どもそれぞれにいろんな人と話せたのが楽しかったと報告会をしていました。

阿南.. 生徒さんそれぞれがそれぞれフィールドを広げて、それを持ち帰って学校で共有することもまたいいですね。いちばん最初、この開発途上国に何の映画を配給したいというイメージはありますか？



interview

井上.. WTPの拠点がカンボジアで、設立して7年くらいになります。が、やはりカンボジアに行きたいという気持ちはあります。WTPが作った映画、俳優の斎藤工さんが作ってくれた映画があって、それを届けたい。映画の上映には権利とかが絡んでくるので、自分の好きな映画を勝手に上映できないんですが、自分の団体を持っている映画、映画の妖精フィルと「ム」を届けられたらと思っています。私は撮る側希望ですが、まずはそれだけでもいいかな。

国際協力への関心 「そのとき直感で思いました」

阿南.. 井上さん自身はJICAや国際協力をしている団体に興味はもともとありましたか。

井上.. 気づいたころにはありません。中3くらいのとき、社会の教科書に国際協力のページがあって、そこにすごく小さい、骨しかないような男の子の写真があって、授業中でしたが見た瞬間に泣いてしまいました。私が将来関わりたいのは、こだとそのとき直感で思いました。

阿南.. そういう話はいつも「家族にする」？

井上.. 私の関心事に家族は勘づいていると思います。私は映画を四六時中、朝は3時から観ています。水俣から朝5時半に家を出るので、夜は1時くらいに寝ます。映画を観ようと思えば起きるんですよ。そのくらいしなきゃ観れません。

阿南.. それはご家族も勘づくよね。海外に行ったときも賛成してくれましたか？

井上.. 最初は反対します。それを説得して最終的には賛成してくれています。トビタテ！留学JAPAN」のときは合格のため必死で勉強しました。高2では別のやりたいことが見つかる気がしていたから。

阿南.. このエッセイコンテストに応募しようと思った動機はなんですか？

井上.. トビタテ！留学JAPAN」に参加する前からずっと気になっていました。トビタテ！留学JAPAN」に参加した友達も皆気になっていたみたいで、皆で書こうと盛り上がったこともありました。

阿南.. 優秀作品(最優秀賞・優秀賞・審査員特別賞)は海外研修に行きますね。狙いに行った？

井上.. 応募数が多いので、まずは審査員の方に読んでもらえるだけで嬉しいなと考えていました。読んでもらえるならひたすら熱いものを書いて、少しでも気持ちが伝えられたらと、下書きもせず書きました。

先生.. 語っている感じがすよね。筆が流れている感じ。面接のときなんかもそうですが、思ったままに話したり書いたりするのが好きです。

伝わる 変わらないうちの心

阿南.. 渡邊先生は井上さんの作品を読んで何を感じましたか？

先生.. 漢字の間違ひもなかったの、そのまま出しましょう、と。先生に言われた日に書き終わりました。授業中に終わりませんでした。

先生.. もともとの思い、せばぶれなくても、そのときに話したいことやそのとき話す相手に対して、言いたい！と思ったことを言っているように思います。

井上.. 聞いてくれる人が面白いようにとは思うのですが、なかなか自然にそのあたりを変えていても、変わらないうちの心は伝わってきます。話すことによって自分の思いは強くなるだろうし、聞く人は聞く人で自分も何かやってみようかなと思えるので、それはとてもいい形になるんじゃないかな

先生
井上
ワークシヨップもしたでしょう。

学校で「ホビタテ！留学JAPAN」をひたすら押そうとワークシヨップ」をやりました。ワークシヨップなので、実際にみんな留学計画書を作りました。どこに行きたい、なぜ行きたい、なぜそこじゃないといけない、なぜ今じゃないといけない……参加者の心をえぐるようなワークシヨップをしたかと思つてやりました。来た人だけどうぞつて、クラスにチラシ貼つて集めました。最近チラシばかり貼つたので、有名人になったかな。恥ずかしい。それだけじゃなくて、リコーダーを集めもしたんです。それは「ホビタテ！留学JAPAN」の自主活動で、アメリカの映画文化を知ろうという目的で行ったんです。私は映画業界で働きたいと思つていたので、実際に映画を撮りたい側なのか売りたい側なのかまでは決まっていまませんでした。でもそこをあえて決めるわけではなく、いまは知るころから始めようと思ひ、カリフォルニア大学の映画学部を卒業した日本人の「夫婦にコンタクトを取って行きました。そのおふたりが私の活動を聞いて、やつてほしいと頼まれてやったのが、リコーダーを集めてギニアに送ろうというプロジェクトでした。リコーダー演奏家の方がやつているみたいです。校内でリコーダー集めました。たくさん集まりました。

阿南
いろいろなことに挑戦して、いろいろな繋がりができたんです。高2、高3と今度の夏にやりたいことがありますか。

映画、好きなことから生み出すつながり

井上
やりたいことは山積みなんですけど、今年の夏はWTPに全力で取り組みます。ドキュメンタリーを撮るために、それまでの期間はクラウドファンディングやつてみたいです。夏以降はそのドキュメンタリーをいろんなところに持つていつて上映してWTPの宣伝活動を頑張つて、WTPの組織拡大をメインにやつていこうかと思ひます。

阿南
井上
ドキュメンタリーを撮るっていうのは、WTPがカンボジアで最初に上映した映画を観た子にインタビューをするとか、彼らにも映像を撮つてもらおうとか、現地の声とかいろいろとまとめたものを作りたいです。そして、WTPの活動や現地に届けてどういう効果があるのかとか、現地で見られないことをやろうと思ひます。

阿南
井上
井上さんがもしもカンボジアに生まれた子どもでも、初めて映画を見たら、版權のことはさておき、何を観たい？ ミュージカルですかね。歌つて踊るハッピーな映画。団体の代表によると、開発途上国の子どもたちに夢を聞いたら、教師とかお医者さんとかくらいしか答ええないそうなんです。その理由は、彼らの将来の夢の選択肢が少ないからだと知り、選択肢を増やせばいいのと思ひました。でも、とりあえず歌つて踊る映画を最初に観てハッピーになりたい。

阿南
井上
井上さんが観る映画のジャンルはミュージカル系だけ？ ホラー以外は観ます。プリン系と呼んでいる……アクション映画が好きです。でも全部好きですね。

阿南
井上
高校を卒業後の具体的な進路のビジョンはありませんか。最近ぶれているんですけど、ここ最近ではカリフォルニア大学の映画学部に行きたいと思つていました。その前、高校卒業してから入学までは世界一周して……と、2〜3週間前まで考えていましたが、最近違うと思ひ悩み中です。映画学部は映画を作ることに偏っている気がするのと、違う分野を学びながらインターンをする方が実際に身につくものが多いのかなと思うからです。せつかなので国際協力の分野とか、アメリカじゃなくあえてドイツとかフランスとか、そのあたりに行つてみるのも面白いかなと最近思ひます。



interview

飯野
井上
お父さんかお母さんか映画がお好きだったんですか。

記憶にはありませんが、お母さんが妹を出産するとき、しばらく祖母に預けられたそうです。そのとき、千と千尋の神隠し」だけを毎日3〜4回ずつと観ていたそうです。それが映画好きの始まりなんじゃないかと言われました。私の伯父が観た映画のソフトもずっと譲り受けて観ています。映画館が近くなったこともあるかもしれないですね。中学生になって行きやすくなった。はじめは映画のパンフレットを集めるのが好きで、観ていくうちに好きになったような。

井上
小学校のときの記憶ですね。

飯野
井上
ジブリが好きで、ジブリを見てた記憶くらいしかないんですよ。私が自宅で映画を観ていたとき、母が看護学生のとくに試写会で行った気がすると言っていました。

先生
井上
映画の話は誰かとするのですか。

飯野
先生
私の周りにはあまり映画好きがいなくて、いつも1人で熱く語つてしまいます。悪いと思ひながら。

阿南
井上
高校生としての好きのレベルがすごく高いと思う。そのうちみんな追いつくから、いまはいいよ。

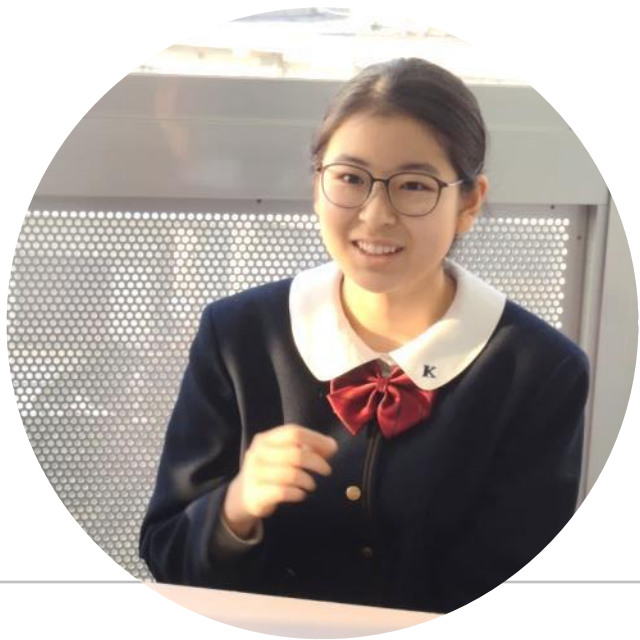
飯野
阿南
ぜひいろんな人に、途上国といわずいろんな人とつながつて、いろんなことに挑戦してください。これからはいろんな働き方が出てくるから、2足、3足とわらじを履いてね。想ひは叶います。

飯野
阿南
楽しいと思つている間は何足でもいけます。

今日はお忙しいなかありがとうございます。頑張ってください。井上さんのこれからは本当に楽しみます。



Thanks!



Hello!

川江芽生さん

平松学園向陽中学校 / 大分県大分市
中学生の部 **所長賞**

お菓子を作ったり、売ったりすることで、
私よりも小さい、顔も知らない人たちを救えることはすごいことだなと
自分自身でやってみて感じました。



JICAデスク大分の佐保好信とJICA九州・市民参加協力課の赤井雄俊が

平松学園向陽中学校で、所長賞受賞者の川江芽生さん、そして、瀧野公之先生にお話をうかがいました。



interview

マフィン？！一見すると国際協力と関係ない？

佐保 まずは受賞おめでとうございます。
川江 ありがとうございます。

川江 川江さんの作品を読ませていただきましたが、私は個人的にこの出だしの「マフィン作るよ」というスタートがとてもユニークだなと思いました。国際協力に「一見、関係のないこの「マフィン」というフレーズから始まる」ところが、個人的にすごく気に入っています。さて、早速質問したいと思いますが、川江さんがいま夢中になつていて、マイブームはありますか。

川江 そうですね、いまは週末に読書とか、マフィンのようにお菓子作りもしています。それはお母さんの手伝いで一緒に作ったりしているというんですか。

川江 一緒に作ったりするのはよくあります。今回のエッセイコンテストに応募されたきっかけを教えてください。

佐保 そうなんです。このエッセイコンテストは宿題だったというのですが、実際に作品を書いてみて良かったことや、途中で何か調べたようなこと、関心を持ったことなどがあつたら教えてください。

川江 作品にも書いたとおり、その女の子が「私たちのために募金をしてください」という動画はフェイスブックで見たとです。それからフェイスブックとかよくチェックするようになったり、世界で災害とかあつたら気になって見たりするようになりました。

佐保 彼の国の災害や世界で起きている他の問題にも興味を持ちましたか。

川江 地震はいろんな国で起きているし、関連することはよく調べました。

佐保 作品を通して伝えたかったことはありますか。

川江 出だしにもあるんですが、お菓子を売ったり売ったりすることで、私よりも小さい顔も知らない人々を救えることはすごいことだと自分自身でやってみて感じました。小さなことでもやることで誰かのためになることをすごく伝えたかったです。

佐保 はじめは乗り気じゃなかったと書いていましたが？

川江 乗り気じゃなかったのは、海外の人と話が通じること不安だったからです（お母さんが勤めている大学の教授とチームを組んでやりました）。でも実際には海外の方が手に「ナアウト」してくれたのがすごく楽しかったし、言葉が伝わらなくても相手とちゃんと気持ちを伝えることはできるんだと自分で体験できて面白かったです。

佐保 この募金活動で、国際交流を身近なところで体験できたんですね。そこにはいろんな国籍の方が来ていたんですか？

川江 いろんな方がいました。インドから分からないんですが、なにかおでこにつけるじゃないですか。それをやろうと誘われて、丸いシールを一緒に貼るような体験もしました。

積極性、コミュニケーションしたいです！

佐保 実際はその体験を日本、大分でするなかで、海外の文化に触れることができたんですね。

川江 では次に、いま川江さんが実践していること、これからしたいことなどありますか。

佐保 いま小学校は再建できていて、これからは教材とかを送るために募金するようなことを聞いたのですが、またそれに参加したいと思っています。

川江 今後そういった活動の中で、またお菓子を売る、あるいは自分でやってみることはありますか。お菓子を売ることでだけでなく、その当時私は小学生で、自分から積極的に話しかけることはできなかったもので、次は自分からいろんなものを売っている人とコミュニケーションしたいです。

佐保 国際協力や支援、募金活動等から離れて、将来やりたいことや興味があることはありますか。英語を使って海外の方と接するお仕事はしたいと思っています。

川江 そのために、今回例えは英語をもう少し勉強しなきゃというスイッチも入った感じですか。そうですね。あれから英語については検定とか受けるようになりました。

佐保 そのときは日本語が話せない方とも話をしましたか。

川江 そのときは英語が話せる母が隣にいたので、次にもしそういう機会があれば、自分から積極的に英語で話したいと思っています。

Interviewer: 佐保好信 / 大分県国際協力推進員

青年海外協力隊員として服飾関係の指導員としてフィリピンに行ってきました！大分県の皆さん、こんにちは。国際協力、国際交流と聞くと難しく考える方がいらっしゃいますが、実際は身近に出来る事がたくさんあります。ご興味のある方はお気軽にお問い合わせ下さい。iichiko総合文化センターの地下1階にあります、おおい国際交流プラザでお待ちしております。大分県をもっと国際色豊かにしていきましょう。JICAデスク大分 <https://www.jica.go.jp/kyushu/pref/ohita.html>





佐保：
んな国に興味を持ってほしいとAPUさんに毎年行つて体験
をしたり、留学生と一緒に京都への修学旅行に行つたりして
います。そういった意味でもぜひ来年あたりに出前講座をお
願いしたいと思います。本当にありがとうございます。
お忙しい中ありがとうございます。



Thanks!



interview

J

I

C

A

2017年、エッセイコンテストのテーマは？

「世界の人々と共に生きるために - 私たちの考えること、出来ること -」

全ての人により良い世界を。そんな願いを込めて掲げられた世界の新しい目標。持続可能な開発目標（SDGs）が2016年から始まりました。貧困、健康と福祉、教育、ジェンダー平等、気候変動、資源・エネルギー、格差の是正、平和、持続可能なまちづくり等、様々な課題について、エッセイを書くことを通じ、私達の身の回りの出来事から、世界の人々と共に良い世界を目指し、自分たちのできることにについて考えてみましょう。その考えを言葉にすれば、世界を動かす力になるはずです。自分自身の思いを伝える場として活用してください・・・[JICA地球ひろばホームページ](#)より



Hello!

御厨美月さん

大村市立郡中学校／長崎県大村市
中学生の部 **所長賞**

私たちが動物を鎖でつないでいるのを
なぜ普通にしているんだろうと書いてありました。
それもカンボジアでの体験と同じだなと思いました。



JICAデスク長崎の茂田敬介とJICA九州・市民参加協力課の飯野純子が

大村市立郡中学校で、所長賞受賞者の御厨美月さん、そして、太田綾美先生にお話をうかがいました。



interview

でも、英語は苦手なの…

茂田 所長賞の受賞、おめでとうございませう。僕は協力隊に2012年から2014年参加して、4年前に帰って、次はアフリカのアンゴラ共和国で地雷除去の活動をしていました。御厨さんもカンボジアに行ったんですね。

御厨 はい。大学のボランティアに同行して、ツアーに入っ

茂田 僕はJMAS(日本地雷処理を支援する会)という地雷除去NGOの駐在員として仕事をしておりまして、帰ってきていまJICA長崎デスクで世界が気になっている長崎の人たちの応援団をしています。よろしくお願ひします。

飯野 今日はお忙しいところ時間調整をしていただきありがとうございます。御厨さんは協力隊に興味がありますか。いずれ参加したいと?

御厨 でも英語は嫌いなので…

飯野 まだ1年生でこれからだから、なんともありません。応募の際は、英検3級くらいです。世界では、英語以外にもたくさんさんの言葉がありますから。

茂田 TOEICだと330点で言われています。中学校卒業レベルです。いま、ボランティアに興味はありますか。

御厨 はい。

茂田 世界のこと、困っている人に興味があつて、その人たちの助けるために英語が必要となったときに急に、分からないけれど話せるようになっていくと思ひます。

御厨 頑張ります。

自分の当たり前、世界のみんなの当たり前

茂田

御厨さんはそれ以上に大事な素質を持っているのではないかと、作品を読んで思ひました。これからのいろいろお話を聞いていきたいと思います。まず、作品のなかで、大学の先生から「そもそも不平等なんだ」と聞いてショックを受けたという印象的なフレーズがあつて、普通ならみんなが平等で差別のない世界にしようと思ひます。学校に行ける子いけない子、ご飯が食べられる人食べられない人。実際に見ると、教科書やテレビで見るより遥かにショックが大きいですよね。いい経験をされたと思ひます。さらに、日本に帰ってきて、「私は幸せだと思ひました」よね。思ひました。

茂田

御厨 勉強すること、ご飯を食べること、自分が味わつてる当たり前がいつか世界のみんなの当たり前になってほしいと。そのためには、貧しい人に努力してほしいではなく、みんながひとりひとりの前のやれることを見つけてきたら、世界はきっとよくなる。これはまさに、いま世界がこうしなきゃって動いていることで、みんなが幸せになるための目標を立てたんですね。先進国も途上国もやるべきことがそれぞれにあつて、世界のみんなそれぞれでやりましようと言つています。実は御厨さんが作品のなかで言つていたことは、まさにこのことなんです。だからすごいと思ひました。さて、応募のきっかけというのはいくら聞いてもいいですが、私がカンボジアに行く話を母が太田先生に話したそうなんです、そして太田先生がこのエッセイコンテストの応募書類を持つてきてくれました。カンボジアには祖父と母と行きました。祖父がもともとカンボジアの貧しい子どもたちを預つていて、その寮を会社かなんかで作つていて、そこに「まづきハウス」という名前をつけて、それで私も連れていきたいと前から言つてました。

茂田

それは孤児院ですか。貧しい子どもたちがいる施設なのか、学校なのか…

御厨

彼女の体験を、ぜひなんらかの形に残してみんなに知らせてほしいと思ひました。

先生

もともとエッセイコンテストのことはご存知だったんでしょうか。

茂田

先生 おじいちゃんはずいぶんカンボジアに行ったか聞いたことがありますが、家族と一緒に支援していただくのではなく、おじいちゃん1人でやつてるんですね。

御厨

祖父は旅行によく行きます。大学の先生と知り合ひしたので、それで一緒に行くみたいです。

茂田

ウエスレヤン大学の先生です。

御厨

もともとボランティアに興味があるということですが、海外にも興味はありましたか。

茂田

カンボジアに行くまで興味はありませんでした。行つてから興味が出ました。

御厨

行くときは不安でした?

茂田

楽しもうかなと。

御厨

前向きですね。アメリカがいいとかヨーロッパがいいとかじゃなくして?

茂田

おばさんが香港の人と結婚して、2回くらい行ったことがあります。

御厨

アジアが身近だったんですね。

茂田

また行きたいと母に言つたら、高校生になつてから1人で行きなさいと言われました。

茂田

次にいきたい国はありますか。

Interviewer: 茂田敬介 / 長崎県国際協力推進員

青年海外協力隊員としてコミュニティ開発の分野でザンビアに行ってきました! JICAデスク長崎があるここ出島には、何百年も前から、海外に『ドキドキ』『ワクワク』した人たちが集まっていたようです。よかったら、今あなたが感じている『ドキドキ』『ワクワク』も、聞かせてもらえませんか? 海のすぐそば、出島ワープと長崎県美術館の横、出島交流会館1階のJICAデスク長崎まで、どうぞお気軽にお立ち寄りください。JICAデスク長崎 <https://www.jica.go.jp/kyushu/pref/nagasaki.html>



御厨

またカンボジアに行きたいです。向こうの施設で仲良くなつた友達と手紙やミサガをもらったりして、仲良くなったからまた会いたいです。もっとカンボジアを見てみたいです。友達は何歳くらい？

御厨

16歳くらい。まだちっちゃいちっちゃい子からいる。3歳くらい。

茂田

それはカンボジア、みづきハウスじゃないとだめですね。いま、夢中になっていることはありませんか。また、行ってから変わったことはありませんか。

御厨

あまり変わってないですが、ずっとピアノを頑張っています。ユリリ……！On ICEってアニメの曲です。前は近所に行った韓国の人やってるピアノ教室に、英語のついでに習いに行っていました。いまは教室を変えてやっています。前は適当に教えてもらっただけなので、基礎はできていませんが。

茂田

いまは好きな曲を弾いて楽しいわけですね。好きな曲をやるためには自然と頑張れますよね。他に好きな曲はありませんか。

変わったと、感じ方、そして行動

御厨

SEKAI NO OWARIの「深い森」という英語の楽しい感じの曲なんですけど、日本語訳を見たら、ヒトラーがやったことについて書かれていて、私たちが動物を鎖でつないでいるのを、なぜ普通に見ているんだろうと書いてありました。それもカンボジアでの体験と同じだなと思いました。牛はみんなガリガリで、それを普通に見ているのってなぜだろうって。そこがつながったんですね。音楽とか歌詞から感じるということがカンボジアに行く前と後で変わった。

茂田

だいぶ変わりました。その他にも例えば、新聞の読む欄が変わったとか。変わりました。

御厨

どんなところを見るようになったんですか。

茂田

大学の人たちがその施設にそうめんを届けたという記事が載っていたんです。それから少し見るようになりまして。去年10月ごろの長崎新聞です。

飯野

カンボジアでは英語でコミュニケーションしたんですか。

御厨

話はないけど、少しは書けるので筆談をしていました。帰ってから英語に対する取り組みや姿勢に変化はありましたか。

御厨

頑張らなきゃっていう気持ちはあります。

茂田

さっき話した英語嫌いとか、いま話した英語を学ぶテンションが下がって、おんなじ英語をしないでも実はまったくの別物だと思えます。だから、やらなきゃがあるなら、いつでも始められるように準備しておくといいですね。これからの将来の夢とかを聞いてみたいですね。まだ大きくは考えてないですか。

御厨

海外の仕事してみたいなって思うんですが、自分が何ができるのかよく分かりません。貧しい人を助ける人になりたいけど、職業としてそんなのあるのか……

茂田

やりたいことがない、やりたい分野が決まっていなくても、貧しい人を助けたらという熱の部分があればそれでいいと思います。あとはこの手段を決めるために、いろんなことを学ぶといいですよ。

飯野

作文書いてって言われてどう思いましたか？作文は好きですか？

御厨

好きです。小学生のころからよく書いていました。発表もしていました。

飯野

そうなんです。じゃあイラストと書けたんですね。

御厨

期限が迫っていたので、1日でバツと書きました。

飯野

そこから始まるかもしれないですよ。

先生

本も大好きよね。



interview

御厨

灰谷健次郎の『太陽の子』が好きです。沖縄戦の話で、私と同じくらいの年の女の子が主人公です。お父さんが戦争のことで心の病気にかかって、最後に死んでしまうんです。いま日本は平和だけど、他の世界は戦争や紛争がたくさんあって、カンボジアも30年くらい前まで内戦があつて、今でも苦しんでいる人がいるんだとカンボジアでも感じました。

茂田

長崎県出身の協力隊経験者で、NHKのディレクターをしながら小説を書いている人がいます。ものが書けるって本当に役立つと思います。文を通して人を説得するときに、感情の部分で役立つのは音楽なんですね。作文も含め、これまでやってたいろんなこと(点)が重なったときに、このためにやつたのか！と将来思えるときがくるはずですよ。

飯野

今日、茂田さんとお話をしてみて何か感じたことありますか。

御厨

いま私はカンボジアや貧しい人のために何もやってないと思っていたけど、いまは準備をしているんだなと分かりました。

自分が悔いている、動けなかったから不正解だった

茂田

次に先生に質問をさせていただきます。御厨さんの応募のきっかけはカンボジアに行かれることでした。エッセイコンテストについても「存知だった」ということなんですけど、学校として取り組まれているわけではないんですね。

先生

はい。作品の応募案内は学校にはどうも来るので、そのなかからこの子がボランティアに行くと聞いたときに、子どもの考えを広めるにはこれがいいんじゃないかなと思って、ホームページで詳しく調べました。

茂田

ホームページを調べてくださったんですね。ありがとうございます。彼女の文才には気づいていましたか。

先生

はいもちろん。この子なら書けるかなと。

茂田

御厨さんの作品を読まれてみて、どんな感想を持たれましたか。

先生

いちばん印象的だったのが、自分がやれなかったことは、不正解である。自分が悔いている、動けなかったから不正解だった。この思いに衝撃を受けました。自分がやろうと思つたら、動かなきゃという気持ちを持ったところですね。それがどう思われようと自分がやろうと思つたら動いていく。この子の気持ちがあつたかと思えました。

茂田

修正などはされましたか？

先生

順番とか構成とか少しだけです。分りづらいいことを少し手直しました。作文は大人の視点でいろんな言葉を加えることができますし、どうとでもなるんですが、子どもからでてこない言葉を入れたくありませんでした。この子の思いをより良く伝えられるくらいの手直しをしました。

茂田

御厨さんのメッセージは先生にもがっつんと届いていたんですね。先生ご自身は、海外の印象についてどう思われますか。行った国などは。

先生

楽しいところにはかり行きます。ヨーロッパ好きですよ。

茂田

海外に行かれたときに感じることはありますか。

先生

それぞれ国のそれぞれの良さというか、日本と全く違うところに行くのはとても好きです。自分自身がなんにもとられない1人の人間になります。日本にいるという人も「ころから先生」という声が聞こえてきます。どうしても日本ではその殻があつて……青年海外協力隊も、なかなか踏み出せませんでした。気がななつていました。この子が見せてくれたカンボジアの写真のなかに、本校の補助バッグをこやかに持っている子がいて、衝撃を受けました。本校生徒もいるんだと知り、家じゅうの掃除をしました。不要なものを送る途上国へ送る活動をしている団体へ、使えるものは送ろうと



飯野： ・・・
先生： 今日表彰式をしていただいて、みんなにもエッセイコンテストの受賞を報告できました。
飯野： 来年以降、茂田さんの出前講座などにもつながればいいですね。
茂田： そうですね。
先生： お話していただきたいですね。
飯野： 今日は本当に改めまして、所長賞の受賞本当におめでとうございました。時間をとっていただきありがとうございます。



Thanks!



interview

J

I

C

A

2017年、優秀作品が掲載されています！

[国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2017年度優秀作品](#)

コンテストは、2017年で、中学生の部は22回、高校生の部は56回を数え、中学生の部38,459点、高校生の部31,685点、総数70,144点もの作品を全国からお送りいただきました。その中で、最優秀賞である「独立行政法人国際協力機構理事長賞」、「外務大臣賞」、「文部科学大臣賞」や優秀賞、審査員特別賞、国際協力特別賞など様々な賞を受賞した作品がJICA地球ひろばのホームページにまとめられています。ぜひご覧ください。

各賞を受賞した学校の先生にコメントをいただきました。



comment



所長賞／福岡県 中村学園女子中学校 ヤンケ 真弓さん 沖野 寛之先生

本校では2014年SSS(スーパー食育スクールの)指定を受け、その際教科横断型の取り組みとして、国語科でも「食」に関する題材を取り上げ、「食と経済」の関わりや「日本の食の自給率」などに関心を持たせ、夏休みには生徒各々が、関心を持った内容をそれぞれ具体的に深めていき、作文を書く指導を始めました。この取り組みは、知識を深めるとともに、自らの食生活の課題や人類共通の課題を解決するために必要な力を身につけることを目的とした取り組みでした。そして書きあがった作文を、予ICA国際協力学中生・高校生エッセイコンテストに応募するようになりしました。初年度はこのように「食問題」に特化した内容で応募しましたが、3年目である2017年度は「食」以外にもそれぞれが感じている「人類共通の課題解決」のための思いを自由に書かせるように指導しています。グローバルな話題というものは、一般論に陥りやすいと思いますが、ようやく身近な課題や具体的な経験をもとに良い内容の作文が書けるようになってきたところです。このように賞をいただけることは受賞した生徒だけでなく、本校全生徒の励みにもなり、今後も探究心を持って自分の思いを書いてチャレンジさせたいと思います。



所長賞／佐賀県 佐賀学園成瀬中学校 ナヒハ カンさん 筒井 ゆう子先生

本校は今年開校21年目を迎える私立中学校です。本エッセイコンテストには開校当初から、毎年夏休みの課題として全校で取り組んでいます。

2年生の2月には9日間の英国語学研修旅行を実施。そのために総合的な学習の時間を中心として国際理解学習に力を入れています。イギリスと日本における歴史、文化、教育などを調べた後現地へ向かいます。現地ではホームステイをし、ホストファミリーと直接会話をしたり、現地の中高生とのディスカッションを通して疑問点を掘り下げ、生徒たちは異文化理解に努めています。

また、本校では毎年6月に主張発表会を開催しているが、英国語学研修旅行を経験し異文化に触れた3年生は、広く世界に向けて、発展途上国の医療問題や学校に通えない子どもたち、難民や紛争、テロなどについて意見を述べる生徒も多くみられます。

今年は佐賀・福岡・長崎で学んでいる14名のアジア各国からの留学生が本校を訪れ、1年生も国際交流を計ることができました。生徒たちは楽しそうに積極的にコミュニケーションを取っていました。各学年とも異文化に触れることが自分を見つめ直すきっかけになっているようです。

生徒一人一人がそれぞれの考えを述べる場として、このエッセイコンテストに今後とも参加していきたいと思えます。



所長賞／熊本県 熊本学園大学付属中学校 永濱 日菜さん 山住 洋平先生

本学では各学年で学習テーマを設定し、総合的な学習の時間を中心に学びを深めています。エッセイコンテストに応募した2学年のテーマは「福祉と平和」。その学習を進めていくなかで、国外の福祉や平和について考えるきっかけを熊本県国際協力推進員の阿南栄子様にご提供いただきました。その際に、このエッセイコンテストの存在もお教えいただきました。

グローバル化する世界の中で、自らがどのように行動すべきかその疑問について、考えを深め、自ら行動できるようになるためにSDGsの17の目標のいずれかを選択し、エッセイ執筆に取り組みしました。夏休みの課題としたため、生徒の取り組みに差があるのではと多少の不安もありましたが、それぞれが自分なりの課題を持ち、ユニークな考えを示してくれました。なかには調査だけで、数冊のノートを使い切るなど、かなりの熱意を持って取り組んだ生徒も見られました。

エッセイ執筆で様々な学びがあったなかでも最大の収穫は、遠くの国で起きている、自分と関係のない何かが、自分の日常とつながっているという実感でした。今後も、国際協力出前授業などのプログラムと組み合わせながら、コンテストへの応募を続けていきたいと思っています。貴重な機会をいただき、ありがとうございます。



所長賞／宮崎県 宮崎市立住吉中学校 日高 沙祐さん 渡邊 由美子先生

年に一度は、生徒に国際協力についてじっくりと考え、自分の意見をまとめさせる機会を作りたいという思いから、毎年、社会科の夏休みの課題として、エッセイコンテストに応募させてきました。

普段の社会科の授業でも、世界の貧困や紛争、環境破壊などの現状を示す写真や動画、新聞記事を教材として用いるなど、常に開発教育を意識して取り組んでいます。また、毎年国際協力推進員の方を講師としてお招きする授業も実施しています。

沙祐君は、1年生の時から社会科の興味・関心が強く、いつも熱心に授業に取り組んでいる生徒です。今回の作文にも、意識の高さがよく表されていると思います。この作文を読んで、社会科の授業で教師が教科書の内容を指導することよりも、直接、当事者の話を聞くことの方が強い印象を与えるのだということを感じました。しかし、この作文を書くにあたり、これまで社会科で学習したことが少しも活かされたのであれば、とても嬉しいです。沙祐君は、高校生になっても、世界の現状に目を向け、考え続けていくことができるでしょう。今後も、社会科の授業を通して、世界の諸問題を自分の問題として受け止め、考えることのできる生徒を育てていけたら、と思います。

各賞を受賞した学校の先生にコメントをいただきました。お母さまにもいただきました。



comment



所長賞／鹿児島県 学校法人神村学園中等部 得永 美潤さん 石田 尚子先生

先生、このコンテストに応募してみたいです。」
夏休みの補習中、校内に掲示してあったポスターを見つけて彼女が自ら私に申し出てくれました。日頃から英語や国際交流に大変関心の高い生徒です。その年の7月に参加してきたばかりのラオスでの国際協力体験事業で感じたことが、ポスターを目にしたときに彼女の中で書きたいこととして浮かび上がってきたようでした。

彼女が最初に持ってきたツセイは、あふれる思いを素直に書きつづつた、とても長い作品でした。私自身も知らなかった、ラオスという国の現状、そしてそこで生きている人たちの姿……。彼女の思いに胸を打たれながらも、規定の文字数におさめるために泣く泣く削らざるを得ず、2人でなんとかまとめたのがこのエッセイです。教師という立場ではありますが、私も彼女のエッセイに大切なことを教えてもらった気がします。異国の、異言語を使い、異文化の中で生活している、しかし同じ地球の上で暮らす、同じ人間どうしである私たち。お互いを知るといふ、人との交流においての基本となる思いを忘れずにいようと改めて思わせてもらいました。



審査員特別賞／宮崎県 学校法人宮崎日本大学学園 宮崎日本大学中学校 岩元 咲和さん 江川 智子先生

本校には高等部に英語進学科が設置されており、毎年内部進学者がいる。また、修学旅行で海外に行ったり、夏休みを利用して海外へのホームステイをしたりする生徒もおり、海外に関心のある生徒が多い。単純に、海外に対する憧れだけではなく、多角的な視点から関心を持ち、そのような機会の中で現地でのボランティア活動にも参加して、さまざまな経験をつんでいる。

エッセイコンテストに応募したのも、生徒達にもっとグローバルな視野で物事を見てほしい、世界の実状について真剣に考えてほしいと思ったからだ。全校生徒に夏休みの課題として書かせ、応募した。

事前に授業などで世界の実状について取り扱ったり情報を与えたりしたわけではなく、自分で調べさせ、考えさせた。今回、審査員特別賞を頂いた本校の生徒も、普段の生活の中で感じた素直な気持ちを書くことができていたと思う。身近に外国の方がいる暮らしは今では珍しくもないごく普通のことになっているが、このように差別的な扱いを受けている人もいると思う。そのような場面に直面し、胸を痛め、勇気ある少女との出会いからどういう自分になりたいのかを考えることができたのは、生徒にとっても大きな経験となった。これからも未来を担う若者として、活躍していつてほしい。



優秀賞／鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属中学校 前田 葵さん 「コメントはお母さまの膝子さまより」

(エッセイコンテスト応募のきっかけ(応募の背景など))

日本の、特に地方で生活していると、音楽、映画、文学、食、物等、いわゆる欧米の文化に触れる機会があっても、残念ながら、アジア、アフリカ、中近東、中南米の文化に触れる機会は、そう多くありません。

私自身、中近東の言語や文化を大学で学んだこともあり、娘には、ぜひ欧米以外の文化についても知見を広げてほしいと思っていました。

果たして、派遣事業での経験は、娘にとって何もかもが珍しく、面白いことだったようで、彼女の今後の人生にも、少なからず影響を与えるような出来事となったのではないかと感じました。

そこで、せっかくの貴重な経験をまとめ、形にしてはどうかと、このコンテストへの応募を勧めました。応募してみたの感想、作品を読んだの感想

経験を振り返り、考えを深めながら作品にまとめることで、娘の中で漠然としていた事柄が整理されたように思います。また、娘が書いた作品を、何日にもわたり親子で推敲した、あの夏の日々もよい思い出となりました。

それだけでも収穫であるところ、今回、このような素晴らしい賞をいただき、驚くと同時に、感謝の気持ちでいっぱいです。

娘には、派遣事業への応募からエッセイコンテスト受賞に至る一連の経験を活かし、今後も精進してほしいと思います。



所長賞／佐賀県 早稲田大学系属早稲田佐賀高等学校 佐伯 知香さん 原 政幸先生

未来のグローバルリーダーの育成を標榜して2010年に開校した本校は、毎年夏季休業中の選択課題のひとつとして、このコンテストを生徒のみなさんに紹介しています。国際社会の諸問題に常に関心のアンテナを張らせ、それらの情報の分析力を養成させる入門期としては最適な機会と捉えています。本校は寮生が6割前後を占め、全国各地のみならず、世界中の日本人学校や現地校から生徒が入学してきます。また留学やホームステイ等、海外での生活体験をした生徒も多く在籍しています。彼らの視点は新しく、感性豊かな作品が多く集まります。

この度賞を頂きました佐伯知香さんの作品は、昨夏の海外での実体験を振り返り、そこからの気づきを素直に力強くまとめ上げました。高校生の今を精一杯生きるといふ使命、そして平和は笑顔からと、今の彼女しか発信できないいなやかな説得力が感じられます。

佐伯さんは2019年に佐賀県で開催される「第43回全国高等学校総合文化祭」の生徒実行役員として委嘱を受け、既に全国各地の視察や役員のミーティング等に参加しているバイタリテイ溢れる文武両道派です。今後の活躍がこの受賞を期に益々楽しみとなりました。

各賞を受賞した学校の先生にコメントをいただきました。



comment



所長賞／長崎県
長崎市立長崎商業高等学校 田中 未夢さん 小嶺 博子先生

受賞した田中さんが在籍する長崎商業高等学校は、今年度で創立133年目を迎える九州最古の公立商業高校です。生徒は卒業後、約半数が大学の経済学部へ進学し、半数は主に市内の事務や販売などの職業に就きます。古（いにしえ）より世界に向けて開かれ、現在も国の内外から訪れる多くの観光客でにぎわうこの長崎で生まれ育ち、これからの変化の激しい時代を生き抜いていく本校の生徒たちに、少しでも広い視点で世の中を見、考え、それを形にして発信してほしい、との思いでエッセイコンテストに応募させていただきました。

田中さんは、クラスでは学級委員長を務め、部活動ではバドミントン部のホープとして活躍する生徒です。文武両道を目指し懸命に日々を過ごす中で、この夏は、長崎では当たり前である8月9日の登校日を通して、これまでに学んできたことを振り返り、これから生きるうえで歴史を中心として様々なことを学んでいく必要性を感じることができたようです。

今後、少しでも多くの生徒が、学校で学んだことを足掛かりとして世界について、平和について主体的に考える姿勢を育む機会を学校教育を通して作っていくことができればと考えております。この度は誠にありがとうございます。



所長賞／大分県
学校法人平松学園大分東明高等学校 河野 美紀さん 後藤 典子先生

グローバル社会の中で、世界に向けて視野を広げ、考える力や助け合い力を育てたいという思いから、国際コースでは毎年JICAのエッセイコンテストに応募してきました。

現在、各学年に中国や韓国、ケニアからの留学生達が在籍し、交流する中で考え方の違いや一致点を発見し、良い刺激を受け、生徒達が相互に成長していると感じています。

今回、受賞作品を書いた河野美紀さんも、中学校までは中国で育ち、高校から日本に留学した生徒です。父が日本人で、母が中国人なので、中国語が堪能です。この2年間で日本語も随分上達し、会話はほとんど困ることはありません。日本語の名前を持つことで中国で偏見を持たれ、日本語が上手く話せず、日本でも辛い思いをしたためか人前で積極的に発言することは少なかったのですが、今回の受賞は大変嬉しかったらしく、自信になったようです。仲良しの日本人の友人もでき、友人が自分のことのように喜び励まし合っている姿も見られ、積極的になりました。自分自身の体験を元に、人の痛みがわかる、偏見を持たない人間を目指していることがすばらしいと思います。このような機会を与えてくださりまして、有難うございました。



所長賞／宮崎県
学校法人宮崎日本大学学園 宮崎日本大学高等学校 北崎 桜花さん 樺山 和美先生

本校では毎年、地理Bを受講している高校2年生を対象に、夏季休暇中の課題としてJICAのエッセイコンテストに応募しております。近年の地理の学習の中で、目まぐるしく変化する国際社会を詳細かつ多角的に理解することが求められているのに対して、普段の生活の中で高校生が国際社会の現状や問題点に触れる機会が少なく感じられており、このコンテストを通して世界への関心を深めてほしいと思ったことが応募のきっかけです。また、大学受験やその先の社会で求められる、自分の経験や考えを自分の言葉で表現し相手に伝える力を養う一助にもなればと考えています。学校賞受賞の伝統をつなげていくことの価値も生徒に伝えており、多くの生徒のエッセイ作成のモチベーションになっていると思います。

内容については、多くの生徒が自らの経験やニュースなど身近な事柄を題材にあげ、世界に対する思慮を深めていると感じます。また、このコンテストへの応募をきっかけに将来自らの興味のある分野における国際協力のあり方を知り、その方向に進んで国際社会で活躍したいという目標を持つようになった生徒も多くいます。国際社会への貢献という具体的な目標を設定した生徒はその後の学習意欲が一段と向上し、進路学習としての価値も非常に大きいと考えております。



所長賞／鹿児島県
鹿児島県立鶴丸高等学校 田代 紗彩さん 武富 幸司先生

外国語や海外に関心のあった彼女が中学1年生のときに訪れたマレーシアで心をつかまれたのは、世界遺産マラッカの美しさではなく、多様な人種が交わって国が形成されていることとそれ故多くの問題が存在しているという事実でした。また、中学3年次には国境なき医師団に属する医師と交流して大きな衝撃を受け、国際理解・国際協調への関心を強くしたいとします。そんな彼女が、夏休みの課題作文として「JICA中高生エッセイコンテスト」への応募を決めたのは、ごく自然なことだったでしょう。

自らと大きく異なる価値観に触れたとき、人は大きな衝撃を受けると思います。ときには、強い拒絶感を覚えることがあるかもしれません。しかし彼女は、それを遠く離れた国で起こる自分とは関係ないこととして遠ざけるのではなく、同じ人間として受け入れていくべきものと感じました。彼女がエッセイの中で語った、そんな多様性があるからこそ新鮮な出会いに驚かされたり、多様性の中の共通性を見出し感動させられたりする」という言葉は、国際社会の抱える問題に生涯をかけて携わっていきたいという彼女の強い訴えのようにも感じられます。

人間として、女性として、高校生として、世界中の人々が尊重し合えることを願い、今に感謝しつつできる限りの努力を重ねようとしている彼女の将来が、満ち足りたものになることを願います。

各賞を受賞した学校の先生にコメントをいただきました。



comment



国際協力特別賞 福岡県
福岡県立修猷館高等学校 ラワンチャイクン 茉莉さん 豊田 恵先生

今回のエッセイは、ある雑誌で「ファッションレポリユーション」という団体の存在を知り、それから、縫製工場での少女たちの労働について知ったことがきっかけで書いたそうです。ラワンさんは、幼少ころインドを訪問する機会があり、そこで同年齢の子ども達が貧困の中で暮らしている姿を目の当たりにしました。これも、今回のエッセイのテーマにつながったのかもしれないと言っています。彼女は、好奇心旺盛で幅広く学んでいますが、中でも人道支援に強い関心を持っています。今回の受賞を励みにして、学校内外でさらに学び、その分野で活躍してくれることを期待しています。



国際協力特別賞 宮崎県
宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 遠目塚 優さん 東口 匡樹先生

エッセイコンテスト2017への応募のきっかけは大きく2つある。はじめは私自身の経験から、アイデア共有の重要性を再認識したからである。私は2年間のカナダでの留学を終え、帰国したばかりで、多文化共生社会に向けて日本の(特に地方の)取り組むべき事を考えていた。多様性のある社会では、共生社会を築くために相互理解が重要である。私はカナダでの経験から、相互理解のためには積極的に自分からオープンマインドになり、自らの考えをシェアすることが第1歩であると実感していた。よって生徒たちにもまずは自分がオープンマインドになり、自分の考えを他者に伝えることを学んでほしいかった。

次に本校がSGH指定校であり、生徒にグローバルリズムを実感してほしいという思いからである。本校は文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定されており、地方都市から野性味あふれるグローバルリーダーを育成することを教育目標の一つとしている。その目標達成にむけて、本校では地方に住む高校生こそ世界へのアンテナを高くはり、感性を磨き、発信していく必要があると考えている。そこで夏休みの課題としてこのエッセイコンテストを紹介したところ、SGHのプログラムの一環としてバンラデシ研修を経験した遠目塚さんが応募を希望してくれた。以上の2点が今回応募した背景である。

遠目塚さんが応募してみたいと持ってきてくれたエッセイを読んで、私は驚きと感動を隠せなかったというのが正直な感想である。その豊かな表現力、鋭い着眼点、そして彼女の社会課題への思いを見せてもらったからである。彼女がとても落ち着いて聡明な生徒であるのは知っていたが、今回私が新たに知った、彼女のよりよい未来への情熱をしっかりと示してくれたことを本当に誇りに思う。そしてこのエッセイコンテストは生徒の未知なる可能性を伸ばしてくれる、貴重な機会であると感じた。今後もこのコンテストを通して生徒たちの新たな可能性を伸ばす機会としていきたいと考えている。



Thanks!

ご協力いただいた皆様に感謝を



作品をご紹介します。



essay

言葉にすれば、

世界を動かす力になる！

//



essay

「イスラム教の人、怖っ。」という言葉を目にしてからよく考えるのですが、怖いのはイスラム教の方々ではなく、その過激派であるISの人達だと思っただけです。そもそも実際にイスラム教の方々とは接した事があるのでしょうか。私の知ってるイスラム教の方々はずごく穏やかで親切な人ばかりです。

もとより〇〇の人、〇〇教を理由にその人を決めつけることがおかしいのです。私も、よく「何で？ハーフだから？」と言われるのですが、正直、嫌な気分になります。ハーフも何も関係ないじゃないですか！それから、「ハーフ？じゃあ英語話せるんだ？」ともよく言われますが、どういふことですか。私、日本人なのて言ったときに「え？じゃあ中国語しゃべれるんだ？」って返されるようなものですよ！！私はドイツと日本のハーフであって、英語は母国語じゃないです！と、〇〇人、〇〇教、で自分を決めつけられる事がすごく嫌な人がきつと私の他にもたくさんいるはずですよ。確かにそう思ってしまうような事件も起っているかもしれませんが、例えば、私が小学二年生の時の話です。私は中国の上海日本人学校に通っていたのですが、運動会が中止になってしまいました。反日デモが起って、イベントを行うことが危険と判断されたためです。ですが、「こゝで分かっているほしいのがそれは一部の人が起こした事だということです。つまり、みんながみんな日本人ダメだ、日本人最悪だ、という気持ちではなかったということです。事実、私の父の会社の中国人スタッフのみなさんは反日デモが起ってても態度を変えるなんてことはしなかったですし、むしろ優しく、親切にしてくれました。一部の人が問題を起こしたからって、みんな悪いってわけじゃないんです。「みんな」、「日本人」、「イスラム教」、「ハーフ」なんてひとまとまりにして見る事は良くありません。個人として見て下さい。「ああ、〇〇人だからかな？」というのはやめて、「ああ、〇〇さんだからだね。」という考え方が出来る人になってほしいのです。

どうか、人のことを自分の知っている言葉で片付けるのはやめて下さい。ちゃんとその人の心を、気持ちを、考えを見てあげて下さい。そうすることが出来たら、きっとその人が何人だなんて、何教だなんて、ハーフかどうかなんて気にならなくなるはずですよ。きつといつかみんながそう思う事が出来る日が来ることを信じて、私も行動していきます。



essay

世界には約150ヶ国の発展途上国があります。そして、その国々の現状は、対人・対戦車地雷や不発弾の未処理、HIVや血液感染など、医療の技術や人材、環境の不足など他にもまだまだたくさん問題があります。私の国では、首都などは医療が発達しているけど、田舎では、医療が全然発達していなかったり、医者が足りていないところも多くあります。

また、道路などもきちんと整備されていなくて、よく事故なども起ります。

私は、国に帰ったとき、自分の国みたいな国が、あとのくらい世界にあるのだからとときどき思うことがあります。お金がなくて、三割が貧しい生活をおくっています。だから、前までは、母国が嫌いでした。日本より発達していなくて、友達に自分の国のことについて話したくありませんでした。しかし、5年生のときに、母国に行ったときに、お店の店員さんの温かい言葉や親せきの知り合いなどから、やさしい言葉をたくさんかけてもらって、自分の国のよさを知りました。今までは、見た目で、好きか嫌いか判断していたけど、母国の人々のやさしさに触れることができ、これからは、人々を見て判断しようと思うようになりました。また、お父さんから日本にはないような美しい自然が母国にはたくさんあることを教えてもらいました。また、日本とは異なった文化に触れたり、日本とは違う日常に優しさを感じる機会が多かったりなど、たくさんよさを見つけることができました。やっぱり母国の一番の魅力は人だと思えます。いつも笑顔で温かい言葉をかけてくれて、今では、バングラデシュ人でよかったと思っています。

しかし、大好きな母国はまだ、医療が発達してなくて、医師の数も日本は千人に2、3人に比べ、バングラデシュは0、4人でとても医師の数が少ないです。いくつかの病院では先進的治療が施行されていますが、救急疾患に対して二十四時間常に対応できる医療機関はありません。

私は将来、母国で、お金がなくて治療が受けられない人々のために医者になって、無償で治療してあげ、母国の医療技術の発展に力を入れていきたいです。また、母国だけではなく、世界中の人々の人生を豊かにしてあげられるような医者になりたいです。

そして、母国は発展途上国だけど、母国の人々のよさを伝えていきたいです。

小さな私にできること

中学生の部 所長賞 長崎県／大村市立郡中学校 御厨 美月さん



essay

私が想像していた世界は、テレビで見るとような美しいものや面白いものが溢れているところだ。そして人々はいつも幸せそうに笑っている、世界はそういうすべてが美しいところだと思っていた。

しかし、本当の世界は違っていた。

私は、今年の夏、ボランティア体験のため、カンボジアに行った。そこで目にした世界は、今まで思っていたものと全く違うものだった。

「足をけがしているんだ。だから買ってくれないか。」

五十歳くらいの薄汚れた服を着たおじさんが足を引きずりながらよってきた。

「一ドルだけちょうだい。一ドルあったら学校に行ける。」

七歳と五歳くらいの男の子二人もよってきた。その子たちは、とても低学年には見えない苦しそうな顔をしていた。

町には、物乞いをする足や手のない大人や子どもがたくさんいた。私は、ながめていただけで、声をかけられてもさけてしまった。望みを叶えてやるべきか、どうか何が正解か不正解か、そのときの私にはわからなかった。

そんな時、同行していた大学の先生が、次のような話をしてくださった。

大学生に、ある小さな男の子の写真を見せ、「この子から物乞いをされたら、どうするかと問うと、ほとんどの学生が「あげない」と答えたんだ。理由はと聞くと、「平等じゃないから」と言う。そこで僕は「今、みんなが学校や大学に行っている時点で平等じゃないんだ。世界は全て不平等なんだ。平等にすることはできない。」と言った。でもこの問いに正解も不正解もない。あげるかあげないかは自分で決めるんだ、と。

私は、「この話を聞いて自分がしたことは、私の中で絶対に不正解だと思った。

なぜなら、何もなかったことを、私は、すごく後悔していた。ただ、自分が悔いなく過ごしただけかもしれない。それでも、私は、あのおじさんや「一ドルあれば学校に行ける」と言った男の子たちの力になりたかった。謝りたかった。

何かしたいと思ったのに、何も行動できなかったのは、不正解だ。何が正解かはわからない。でも、自分で決めたなら行動しなければならぬのだ。

小さな私が、今、日本でできること、それはカンボジアで見たこと聞いたことを伝えていくことだと思う。そして一人でも多くの人に、本当の世界の姿に目を向けてほしい。

私は今、とても幸せだ。勉強すること、ご飯を食べることは「あたり前」だ。だからいつか世界の貧しい人たちにも私が味わっている幸せが「当たり前」になってほしい。みんなが今の世界の姿を見て、自分にやれることを見つける。とても難しいことだけとやれないことではない。そしたら世界は幸せになる。



essay

私はある日、母からきれいな青色の不思議なポーチをもらいました。よく見ると日本ではあまり見かけないような色・形をしていました。色はきれいな青色で、形は魚のうろこのようなものがついています。私はあまりにもめずらしかったので、母に「このポーチはどんなものなのか、たずねてみました。すると母は、「これはJICAの活動でアフリカに行った人からもらったものだよ」と教えてくれました。

私はそれからそのポーチのことが気になったので、母にもつとその話を詳しく聞かせてもらいました。話を聞いてみると、そのポーチはアフリカの人がつくった布で作られたものだということでした。ポーチをくださった方は西アフリカの最も貧しいとされるニジエールでの活動をされたそうです。写真を見ると、たくさんのアフリカ人の中に小さな日本人女性の姿がありました。その日本人女性がニジエールで活動した時のことを考えると、恵まれた日本の生活や言語も異なるため、そこで活動するのは簡単ではないと思います。しかし、それを実行した日本人女性はすごいと思いますし、尊敬します。

そして今、私は手元にあるポーチから今まで身近ではなかった世界を知ることができました。

しかし、私が貧しい国・人々の支援を考えて、すぐに活動することは容易なことではありません。私はまだ中学生なので、たくさんお金を持っているわけではなく、稼ぐこともできません。気持ちはあっても、実際に行動するのは難しいと思います。

そこで、まずは身近な所から、いつか外国のためにできることがあるのではないかと思います。

その方法を二つ考えました。一つ目は、一緒に活動し、考える仲間を作ることです。難しいことは一人ではなく仲間と協力して行動に移すということが大切だと思います。二つ目は、今は自分にできる学習をしつかりして、多くの知識をたくわえることです。そしてその学習を通して視野を広げることです。

今は、このようなくとも小さなことしかすることはできませんが、学生の時に、役立つようなことをたくさん学んで、大人になったら目に見える形で支援していけたらと思います。

小さなこと・身近にできることを大切にして、ポーチをくださった女性のように、いつか世界にも目を向けていきたいです。

小さなことが誰かのために

中学生の部 所長賞 大分県／平松学園向陽中学校 川江 芽生さん



essay

「マフィン、作るよー」

本を読んでいた私にかけられた一言。その一言がきっかけでした。

2015年4月25日。ネパールで起きた大規模な地震によって、多くの家屋が倒壊し、七千六百人を超える方々が亡くなってしまいました。この地震により、Ramche村のShree Bhatta(シリ バッティ)小学校でも子どもが亡くなり、校舎が崩壊しました。そこで、母の勤めている大学の教職員の方々、学生の皆さんが学校再建のプロジェクトを立ち上げました。その時、母はマフィンやお菓子を作り、それを募金を呼びかけるチャリティイベントで売ってお金にすることを考えついたそうです。最初、私はあまりのり気ではありませんでした。接客などが私に出来るのか、不安だったからです。そんな時、私は一本の動画を見ました。それは崩壊した小学校に通っている一人の女生徒が募金をお願いしている動画でした。つたない英語でその子が伝えてきたのは、住む家もなくし、今は小屋で暮らしているという私には考えられないことでした。同じ年位の女の子が、こんなに困っているのに、ととたんに自分が恥ずかしくなりました。この子たちのために何かしてあげたいという思いが心の底からわいてきました。

イベント当日。会場設営から片付けまで、一日中手伝いをしました。イベントの最中、現地の様子を映した映像を見ると、今は竹で作られた、せまい小屋で勉強している子どもたちがいました。私だったら、一刻も早くちゃんとした学校で勉強したいと思うはずです。きっと、この子たちもそうしたいはずですよ。そう思うと、その後の仕事にやる気が出ました。

そして、この夏。目標金額の一五〇万円が集まりました。もう工事は、始まっているそうです。ネパールの子たちは、完成が待ち遠しいと思います。そう考えると、私までわくわくしてきました。

これまで、私から程遠かったネパールが、この募金活動を通して身近に感じられました。この活動をしなかったら、今ごろはネパール大地震のことさえも忘れていたと思います。自分のした小さなことが、形になって誰かのためになる。そのことが、こんなにもうれしく、誇らしいことだと知りませんでした。

世界の人々と共に生きるために、私たちにできることは、きっかけは何でもいいから、興味を持つことだと思います。今、世界では何が起きて、どうすれば解決できるのか。一人じゃどうにもならないことも、誰かと一緒なら、何とかなるーそう思うて、一人でも多くの人が世界へ目を向けてくれることを願っています。



essay

僕は今までずっと不思議だった。僕の住む日本はこんなに豊かなのに世界の中にはまだまだ食べ物に困っている人々がたくさんいることがだ。そしてそれは大人も子供も赤ちゃんまでも目の輝きを失ってしまったように僕には見える。そんな国の人達に、私たちは一体何ができるのだろうか。

僕は以前、こんな話を聞いたことがある。アフリカの赤ちゃんを助けるために、粉ミルクを送ったが、赤ちゃんの死亡率は一向に減らない。一体どうしてだろうとその人は現地へ飛んだ。そして全てが分かった。ミルクは確かに届いていた。しかしミルクを溶く水が泥水だったのだ。そしてもらった一つのミルクをうすめて赤ちゃんに与えていたのだそうだ。僕はその話を聞いた時、とてもびつくりした。栄養を与えるためのミルクが泥水でしか溶かせないことが悲しかった。そして少しでも長くもたせようとミルクをうすめて飲ませていた母親の心が痛々しいほど悲しく伝わってきた。これではいけないと僕は思った。

国際協力とは何だろう。貧しい国に物を分け与えることだろうか。確かにそれもあるが、それだけでは的はずれの方向に行くことがあると思う。

僕は小学生の時、チベットから日本にお嫁に来た人の講演を聞いたことがある。日本に来て日本の「豊かさ」に驚いたそうだ。毎日、新聞を読むこと自体が不思議だった。それはお嫁に来た人の故郷では「新聞」はバターを包む時に使うものだったからだ。

「そこにニュースが書かれているなんて誰も知りません。」

と話していた。お嫁に来た人は、自分の故郷と日本の違いは教育の差だと思い、講演などで得たお金で小学校を建てている。

講演の後、僕は全校生徒の協力で集められた鉛筆をプレゼントした。お嫁に来た人はとても喜んで

「必ず子供達に渡します。どうもありがとうございます！」

と大切そうに鉛筆の入った箱を持って帰った。

今の僕が出来ることはささやかなことだけど、僕達の鉛筆をつかってたくさん勉強してほしいと思う。お嫁に来た人が気づいたように、僕も教育は生活の根底で大切な役割を持っていると思う。ミルクをあげる前に、安全な水の作り方を教えてあげなければならぬ。きれいな水は病気を防ぎ、体を守る。根この部分を支援していくことが大切だ。

僕は将来、何か技術を習得し、地球人として国際社会に貢献したい。単にものをあげるのではなく、心や技術を分け与え、その国の人たちがそこで、自分の力で未来に希望を持って生きていけるようにサポートしてあげられるような人間になりたいと強く思った。



essay

「途上国」と聞くと、毎日の生活に困る貧しい人々や、痩せて元気のない子どもたちなど暗いイメージを持ってしまいがちだ。しかし、私のそんなイメージは、七月に参加した国際協力体験事業で覆された。

それは、東南アジアにあるラオスという国へ行き、青年海外協力隊の活動視察やホームステイを通して学ぶというものだった。私は、それまで海外に行ったことがなく、日本という一つの国しか知らなかったため不安も大きかった。そこで出発前にラオスについていろいろと調べてみた。そこで目にしたのは「開発途上国」「世界最貧国」という言葉。私が想像したのは、お金や食べ物に困る貧しい暮らしをしている人々だった。

しかし、実際にホームステイをして私はとても驚いた。そこはラオスの中でも田舎の小さな村で、村全体がひとつの家族のように暮らしていた。自分たちで鶏や豚を育て、魚をとり、調理をし、作りすぎたからおすそわけ。たくさんなった果物も近所の人とみんなで分け合って食べる。そこにいた人々は私が想像していた暗い瞳の人々ではなく、明るい笑顔にあふれていた。

協力隊の方のお話によると、それは「スワイカ」というラオス特有の助け合いの心なのだそう。私はそれを聞いて、なんて温かい国なのだろうと思った。しかし、ラオスが開発途上国なのは事実で、そのために多くの国や団体から寄付や支援を受けているという。日本の寄付で建てられた建物もあり、自分の国の支援が役立っているのをこの目で見た私はとても誇らしかった。きっとラオスの人々からも感謝されているだろう、そう思った。でも、協力隊の方によると、ラオスには支援されることに慣れてしまい、裕福な人が困っている人を助けるのは当たり前という考えの人が多いという。もともと「スワイカ」があるからだろうか。いや、違う。それでは、支援する側の一方通行だ。「助け合い」ではない。私は、支援をされた側が感謝して支援した側との交流を深め、そしてお互いを知ることでもまた新たな協力が生まれるのだと思う。その心のつながりが真の助け合いにつながると思うのだ。

私は、ラオスで人生初の異文化を体験して、たくさんのことを学んだ。何より、自分で本当を知ることの大切さを学んだ。私は、「途上国」という言葉に勝手な偏見を抱いていた。しかし、実際に体験することで、豊かさは表面に見えているものだけではないことも知った。相手を本当に知らなければ、お互い本当の協力なんてできない。今世界で起っている争いも、その根っこには「知らない」ことがあるのではないだろうか。世界には、今日を生きるのに必死な人がたくさんいる。争うよりも、共に生きる世界を作りたい。だからまず相手を知ろう。国を、文化を、生活を知ろう。できることなら自分で体験しに行こう。世界の人々と協力して共に生きていくために。

「This is our culture, that is your culture.」～異文化理解で守る、世界平和と人々の誇り～

中学生の部 優秀賞（本部表彰対象） 鹿児島県／鹿児島大学教育学部附属中学校 前田 葵さん



essay

この夏、私は鹿児島市の派遣事業でマレーシアとインドネシアを訪れ、日本とは大きく異なる様々な文化と出会った。

派遣先の選択肢にはアメリカのマイアミもあったが、私は迷わずマレーシアとインドネシアを選んだ。普段触れることが少ないからこそ、東南アジア文化を体感したかったのだ。

実際に現地で目にした、マレーシアの多民族国家ならではの文化や、インドネシアのイスラム文化は、どれも強く印象に残っている。

私が異文化に触れた感動や驚きを現地の人に伝えた時、彼らが口々に言った言葉がある。

「This is our culture.」

どの人も、自らの文化に誇りを持ってそう言っているように感じられた。彼らの輝く瞳や嬉しげな口調が、今も脳裏に焼き付いている。

帰国してから数日たったある日のこと、私は友人たちに、派遣事業での経験を話した。私が最も驚いたことの一つである、トイレで用を足した後、トイレットペーパーを使わず水で洗う習慣について語った、その時である。「何それ。汚い。」

友人の一人が吐き捨てるように言ったのだ。

私は、彼女の否定的な言葉にとてもショックを受けた。自国の文化を誇らしげに語った、マレーシア、インドネシアの人々の表情や言葉が頭に浮かび、胸が痛んだ。

思えば、今、世界各地で起こっているテロは、このような、自分と異なる価値観の否定が原因だ。また、テロを起こすイスラム過激派と一般的なイスラム教徒を混同し、イスラム教自体を排除しようとする人もいる。これでは異なる考えを持つ人々はいつまでも分かり合えず、それが原因で争いも起こり得る。誰もそんな世の中で生活したくはないだろう。

私には、目標ができた。

「全ての人自分たちと違う文化について理解し、受容できる平和な世界を作りた

い。」

中学校二年生、十四歳。社会的には全く非力だ。そんな私でも、他への無理解が原因の争いや排他主義が存在するこの世界を変えるために、何か行動を起こしたいと考えたのだ。

私には何ができるだろう。そして思い出したのが、私の学校で行われている、「GT」という活動だ。これは、「Global Time」の略で、授業前の朝の時間を利用して、外国の文化について英語で学ぶものだ。私は、GTの企画、運営に携わっている。

このGTの企画を、ガラッと変えるのだ。現在、GTでは主に、英語圏である欧米の文化について学んでいる。その題材を、日本人にとって欧米文化ほどにはなじみのない、アジア、アフリカの文化にすることを提案しようと思う。GTを、皆が、すばらしいのは欧米文化だけではない、と感じる場にするのだ。

文化に優劣はなく、その価値は全て等しい。そのことを、私の派遣事業での経験をもとに、少しでも多くの人に伝えよう。世界中の人が、

「This is our culture.」

と、自分の文化を誇れる世界を築くために。



essay

「やっぱり僕は日本が好きです。」私はこの言葉を忘れない。

私が一人で買い物していた時のことです。その日はとても暑く、お昼前だったということもあり、たくさんの方が買い物をしていました。そのお店にはアルバイトをしている、外国人の男性がいました。その男性はレジの仕事をしていました。レジに並んでいる時、私の前にいた会社員はその男性に「はしを入れてください」と言いました。その声は後ろにいた私にやつと聞こえるくらいの小さな声でした。だから、外国人男性には聞こえなかったようで、「もう一度言ってください。」と言いました。すると、会社員が「お前、日本に何年いるのか。」と強い口調で聞きました。男性は「二年です。」と答えました。会社員は「二年もいて、日本語も分からないし、ちゃんとしゃべることもできないのか。この店はお前のせいで台無しだ。」と言い残して去ってしまいました。私は、日本人として最悪だと思いました。でも、泣きそうになっている彼に私は何も言うことができませんでした。何と声をかけていいのか分からず、ただ見ているだけでした。その時、そんな自分がとても嫌でした。

すると、私と同じくらいの背の女の子が来て立ちつくした彼に言いました。「日本人が失礼なことをしてしまつてごめんなさい。悪いのはあなたではありません。私も外国に住んでいたことがあります。でも、英語が話せずともばかにされました。とても辛かったです。日本はいい人ばかりです。あなたを助けてくれる人はきっといます。だから日本のことを悪く思わないでください」と。するとお店の中から拍手が起りました。男性はお店の中にいた人たちに大きな声で「やっぱり僕は日本が好きです。」と言いました。

私はその店によく行きます。外国人男性はいつも一生懸命働いています。その度に、あの女の子の言葉を思い出します。私にはできなかったことを彼女はやりました。私も強くなりたいです。困っている人がいたら優しい言葉をかけてあげたいです。

外国人など関係ありません。同じ人間として困っている時にはお互い助け合って生きていかなければなりません。みんなが理解し合つて、良いところを見つけ合つていけば、平和な世界がつけられると私は信じています。

高校生の私たちができること

高校生の部 所長賞 福岡県/明治学園高等学校 松尾 桜子さん



essay

私は、今私にできることは正しい情報を知り、それを他の人に広めたり、意見交換の場を作ったりすることだと思っ。

私は今年の三月、学校のアメリカ研修というプログラムに参加した。私は以前から国際協力に興味を持ってはいたが、大人になってそのような仕事に就いてからするものだと思っていた。しかし現地に行き、今私にできることを少しずつでもやりたいと思うようになった。

また、学校で国境なき医師団の先生のお話を伺う機会があった。私は国際協力を始めたいと思っていたので、今私たちができて、一番役に立つことは何かと質問した。先生は、「知ること」だとおっしゃった。正直それを聞き驚いた。なぜなら「募金」などの答えが返ってくると思っていたからだ。そのときはなぜ知ることが大切なのか疑問もあったが、私は自分だけが知って終わるのではなく、たくさんの人にも広めることで、その人たちも知ることができると、自分から広げていきたいと思った。そして、今年の文化祭で一緒にアメリカに行った二十三人と、使わなくなったランドセルや文房具、書き損じはがき、ペットボトルキャップの回収や募金活動をすることを企画した。ランドセルや文房具はアメリカに送り、書き損じはがきはその送料とする。ペットボトルキャップはワクチンに変えて、募金は国境なき医師団に寄付することにした。これは、私たち生徒が必要でなくなったものを寄付するため、学校で行うには無理なくできて良いと思う。もちろん寄付することも目的だが、もう一つの目的がある。それは、私たち高校生でもこのような活動ができ、また私たちが現地の状況を知らせることで文化祭に来た人に状況を知ってもらおうということだ。この企画は今回が初めての試みだが、これがこれから毎年行われ、文化祭が「知る」きっかけになれば良いと思っている。

また、少し疑問に思っていた「知ること」の大切さを感じることでできる機会が今年の夏休みにあった。それは、七月から八月にかけて参加した、日本の次世代リーダー養成塾だ。この塾では、二週間全国から集まった高校生と先生の講義をきいたり、社会の問題についてディスカッションをする中で被災地に適切な支援助物資が届かなかったり、紛争が解決しなかったりすることの原因を話し合ったが、全てにおいて知識の不足というものが出た。一つの問題につき本当にたくさんの方々の案が出たのだが、最終的には全員が口をそろえて、「やっぱり知ることだね」と言っていた。私もディスカッションをする中で自分の知識が足りないと感じることが多々あったり、問題の原因を考えたりしたことで、「知る」ということの大切さを身をもって感じることもできた。塾の期間中は八つのクラスに分かれて活動するのだが、一クラスにつき二名のアジア奨学生がつく。私のクラスは韓国人とマレーシア人で、マレーシア人の学生はイスラム教徒だった。クラスは違うが、他にも中国、タイ、モンゴルから来た学生もいた。私は韓国や中国には悪いイメージを持っていたが、その考えは全くと言って良いほどなくなった。また、イスラム教徒はISの影響もあり、本当に危険ではないのかと少し心配だったが、全く想像と違いフレンドリーで日本人の友達と話しているようだった。このように、実際に会って話したりすることで国は違ってもやはり高校生なのだと感じ、今まで感じていた壁を感じなくなった。正しい情報を知ることでは偏見を取り払うことができた。ここでもやはり「知る」は大切だと思っ。

最後に、今まで言ってきたが、自分が必ずしも正しいとは思わず、積極的に知ろうとする。そこで得た正しい情報を他の人も共有する、これが今、今日から、私たちができることだ。



essay

「自分ができる」とは、何だろう。「そう思い、私は高校一年生の夏、ボランティアとしてベトナムへと足を運びました。ボランティア活動の内容は、経済的な理由により土地や家を借りることができず、水上に家屋をつくり生活している地域で、浄水器の作成などを行うというものでした。フィッシャーアイランドと呼ばれるその地域での生活は、日本にいる私の生活とはかけ離れたものでした。

フィッシャーアイランドでの活動後、一緒に活動している高校生の日本人ボランティア達に、私は問い掛けました。

「フィッシャーアイランドに住む人達より酷い状況下に置かれている人は沢山いる。そんな人達を救うためには、どうすれば良い?」
返ってきた答えは私にとって、意外なものでした。

「そもそも、酷い状況下に置かれている人達を助けたいと思っけていても、国によっては入国すらできないよ。」

私にはこの言葉が、「私たちには無理だ。」という諦めの言葉に思えました。何を言っているのだろう。例え紛争地域であつても、そこに助けを求めている人がいるから、解決のため頑張る。そんなリーダーを選ぶのは私達だ。それにそのリーダーになる権利も、未来もあるのが私達だ。決して無理なんかじゃない。そう思いました。

今の私は15歳。3年後には、自分の求めるリーダーを見極める力を持ち合わせていなければならぬ。そのためには今、何をすべきか。考え抜いた末にいきついた結論は、生きている時間を疎かにしないことでした。一緒に活動したベトナム人のボランティアは皆、常に周りを見て動いていました。活動後の帰りの公共バスの中、日本人ボランティアのほとんどが椅子に座り眠っている中、ベトナム人ボランティアは、乗車してきたお年寄りに素早く気づき席を譲るその光景を、私は何度も見ました。日本でこの光景を見たことは、あまりありません。如何なのか。それは、ほとんどの日本人が周囲ではなく、手元の携帯電話を見ているから。私はそれに気が付いた時、とても情けなくなりました。

今の時間を疎かにしないこと。これは私にとって、ゲームをすることでも友達と遊ぶことでもありません。そういった時間を過ごすよりも、もつと得たいと思える、人の笑顔という存在が、ベトナムでのボランティア活動を通してできました。浄水器を作成し、完成した時の達成感を含んだボランティア達の笑顔。席を譲ってもらえたお年寄りの笑顔。手作りの日本料理を食べてくれたベトナム人ボランティア達の笑顔。そんな笑顔を、私は沢山見たい。人の笑顔を、自分の手で生み出せる知恵と力量を付けるために、私はこれからの時間を大切に使いたいです。



essay

「8月9日って何の日か知ってる?」「この質問に私は簡単に答えることができます。小学学になった年の夏休み、いつものように福岡のおばあちゃんの家へ遊びに行きました。その時に何気なく言った

「あーあ、9日の登校日いやだなあ」

という言葉の返事に私は少し驚きました。年の近いいとこたちは、「えー学校があるの?なんでー?」

と原爆のことなど知らない様子でした。長崎で生まれ育った私たちにとつては、小さな頃から被爆地として原爆や戦争について自然と学んできましたが、一歩外に出ると8月9日の登校日なんていうものはなく8月6・9日に原子爆弾が落とされたということも知らない人たちが多勢いることを知りました。その時はこんなにひどい目にあつてつらい思いをした人々がたくさんいたのに、日本人にもこんなに知らない人がいていいのかと思うだけでした。

小学校の高学年になれば歴史を学ぶようになります。東京大空襲で苦しんだ人がいたんだな、日本は多くの戦争で沢山の人を殺してしまつたんだな。そう学びますが、事実を知つて終わりです。私は東京大空襲が何月何日あつたのかを知りません、日清戦争でどのぐらいの人が死んだのかを、どのぐらいの時間がかつたのかを知りません。きつとこれもほとんどの人がそうだと思います。そう考えると、長崎県民ではない人々が原爆の日を知らなくても仕方がないことだし、知らないからと言ってせめることはできないと思います。私達は身近にあつた自分たちが大きな被害を受けたものだけを語り継いでいるような気がします。もちろんつらいできごとが忘れられることがないよう、そして同じことを繰り返さないためにもそれは大切なことだと思います。しかしそれでは、いつまでも被害者である一面だけを語り継いでしまうのではないかと思います。たしかに日本は大きな被害を受けましたが、その以前には日本が他国に被害を与えた歴史だつてあります。

もつともつと歴史を学ぶ。あのととき学んだ東京大空襲は3月10日の空襲だつたのか、日清戦争は約8ヶ月ほどだつたのか。少し目を広く向け多くの歴史を学ぶ。多くの人を失つたつらい過去、そして多くの人を傷つけてしまつた過去も学ぶべきです。人はあやまちをおかしたり失敗したとしても、自分も同じ痛みを知ることです。反省しやり直すことも、優しい気持ちを持つこともできます。これは一人一人のことだけではなく国と国にも言えることだと思います。世界中の国々が苦しかった過去の被害を忘れられることがないように語り継ぎ、おかしてしまつたあやまちを受けとめることで、あんなにつらく苦しい事を他国にしてはいけけないと思えるのではないのでしょうか。そうすれば戦争も消えていくはずですよ。

今の私たちにおきている戦争をとめることは難しいですが、自分たちが国を担う時代になったとき、歴史を学び、このあやまちを繰り返さないと思うようになれば、そんな国々の人々と共に生きていけるんじゃないかと思えます。

グローバル化が進む今、世界と共に生きるため未成年の私たちにできることは少ないですが、必ず何かにつながると思つて少しづつ取り組んでいきます。



essay

私の夢は夢を知らない発展途上国の子ども達に夢と映画を届けることです。

「この夢を語ると、たいていの人は、「なんで映画なの？映画より先に届けなければいけないものがあるのでは？」と言います。でも私は映画には力があると信じています。シンデレラを見たら、こんな風になりたい、ある人の人生を綴った映画を見ると、こんな人生を歩んでみたい、そんなふうには、映画を見て夢を見ついたり、何かきっかけになったりしたことがある人はたくさんいると思います。そんな映画を発展途上国に届け、たくさんの子ども達が夢を見つかるきっかけ作りをしていきたいです。

私がこの夢を持ったのは、ワールドシアタープロジェクトという団体との出会いがきっかけでした。もともと映画が大好きで、将来は映画の世界で働きたい、と中学校3年生くらいから、ぼんやり考えていました。そんなときにこの団体を知りました。私が見たいと思っていたことがつまづいていました。よし、将来はこの団体に入って、発展途上国に映画を届けよう！そう決めました。

しかし、映画の世界のことや発展途上国のことは、語れるほど詳しくなかったので、何から始めれば良いかも分かりませんでした。とりあえず、本を読もう、と色々な映画人やボランティアをしている方の本をひたすら読みました。何冊ぐらい読んだかはたくさん読みすぎて分かりません。でも、どの本にも共通して書かれていたのは、「海外で感じたこと」でした。そのことに気づいたとき、自分が将来働きたいと思っている世界は遠い場所なんだ、知らないことで溢れているんだ、と感じました。それと同時に、その遠い世界に行ってみたい、まずは「知る」ことから始めようと思いました。そう思ってから様々ながことがトントン拍子に進みました。

国の奨学金制度に援助してもらい、英語の本場、アメリカに留学をしました。留学先を発展途上国ではなく、アメリカにしたのは、映画の世界で働くためにはまず本場を知らなければいけないと感じたからです。留学はたったの3週間でしたが、とても密度の濃い時間でした。映画についてのインタビューをしたり、実際にハリウッドに行ったり、現地で映画を見たり、映画の世界に浸った3週間でした。そして、自分の夢への思いは更に強くなったと思います。

「この留学を通して、たくさんのごことを経験し、私は新たな目標も見つけました。今回は映画の本場を知るために留学しました。だから次は、将来、自分が映画を届けていく場所の現状を知りに、色々な国を回りたいです。その場所の人達にとって映画とはどんな存在なのか、その場所の子ども達の夢は何か、知りたいことはたくさんあります。どんな形で発展途上国に行くかはまだ分かりませんが、必ず行きま

す。そして将来はワールドシアタープロジェクトの一員として多くの子ども達に夢と映画を届けていきたいです。

実際に、発展途上国に映画を届けてきた人は、現地の子ども達がキラキラした顔で映画を見ていたり、映画を見終わった後に、「映画を作る人になりたい。」と言ってくれたりして、とても嬉しかった、と言っていました。

映画を届けることで、何か大きな変化があつたり、何かの統計や調査の数値が良くなつたりすることはないかもしれませんが、でも、映画を見て、1人でも多くの子ども達に夢や目標が見つければ良いなと思います。



essay

私は生まれてきて十五年間ずっと中国で生活していた。現在高校生になり、日本に留学し、日本で生活している。私にとっては中国も日本も大切な国であり、良い関係であってほしいと願っている。しかし、中国と日本の関係はあまりうまくいっていないとは言えないのだ。なぜかというところ、何十年前におきた、南京大虐殺事件があるからだ。それはものすごい戦争だった。三十万人の中国人がそこでなくなつた。そのせいで、半分以上の中国人、特に年輩の方は日本に偏見を持っていた。

実際、私が中国にいる時もそうだ。どこに行っても、私の日本語名を名前を聞いた中国人たちは、変な目で私を見ることがあった。日本にきても、私は中国人で、日本語がうまく話せず、私の話を聞いて、冷たい対応をする人もいた。これらの体験で、私はものすごく悲しかった。

もともとそんなに良くない中日関係で、もっとひどくなる事件がおこった。今年のAPAホテル事件だ。ホテルの中に置いていた本で、南京大虐殺事件は事実ではないことを書いていた。

この事件は中国で大きなニュースになった。多くの中国人はこの事件に憤慨し、もっと日本のことがいやになった。

それを見た私は思った。どうやったら日本人と中国人は平和で仲良くなれるのか。そこで私はネットでいろんなことを調べた。日本人が中国に対して思うこと。中国人が日本に対して思うこと。その結果を見て私は驚いた。多くの中国人の若者は実はもう歴史のことを忘れ、日本の文化、アニメ、漫画が大好きになった。日本人も、中日関係をよくしたいと思う人がいっぱいいる。今年の夏におこった中国四川の地震に対しても、多くの日本人は心配し、去年の熊本大地震にも、中国人は三百万円の人民元を募金した。それを聞いて私はすごく感動し、嬉しかった。

両国関係をよくしたいのに、どうして、うまくできないのだろう。それをずっと考えた結果、人々の態度の問題だと思った。もし中国人と日本人全部態度が正しければ、今の状況にならないと思います。私たちができることは、お互い偏見を持つのをやめることだ。そして、私たちの子どもたちにもこういう教育をすることでは。中日関係が良くなつたら、お互いすごく有益なことではないか。そのためにも、私たちが頑張らないといけない。



essay

日本と同じような医療を提供されていない国が多数あることを知ったのは私が小学校三年生のときである。きっかけは担任の先生がクラス全員に配った一枚の下敷きだ。そこには、目に大粒の涙を浮かべ、肋骨がぎりぎり浮き出て、栄養失調で体はすっかり痩せ細った男の子の姿があった。おそらく年齢は五歳未満だと思われる。小学校三年生の私は「ちよと力を加えれば簡単に折れちやいそうだな。」と思った。さらに男の子の写真の横に添えられた解説を読み進めていくと、五秒に一人の幼い命が失われていること、五歳の誕生日を迎えられずに死んでしまう子どもが大勢いることを知った。

そんな世界の絶望的状况を忘れかけて、というよりは気づいていないふりをしていた私は中学二年生の時、あることがきっかけで看護系の仕事に就きたいと思った。両親も賛成してくれたので、さっそく色々な大学を調べたり看護職について調べた。当時は早すぎると思われた進路選びが、今思えば私にとって人生の一つのターニングポイントだったのかもしれない。なぜなら忘れかけていた小学三年生の頃の記憶が少しずつ蘇ってきたからである。ユニセフの活動に興味のあった私は、ホームページを開いた。すると、どこか見覚えのある痩せ細った男の子の写真が目飛び込んできた。あの時見た写真とそっくりだった。そこで私はもう一度、日本がどれだけ恵まれた国であるかと思うと同時に「この貧しい子どもたちのために何か役に立ちたいという気持ちがいよいよ出た。」

とは言うものの、学生の私に具体的なことは何もできず、できるとすれば僅かばかりの募金だけであった。だが、発展途上国に関するニュースがあれば必ず見た。知識だけは着々と増えていった。

高校一年生の夏、志望大学のオープンキャンパスに行った。もちろん看護学部だ。学部の説明の中にJICA研修という活動の説明があった。JICAという組織の存在は知っていたが、大学の活動の一環としてそのような研修があることにとても魅力を感じた。内容としては発展途上国の看護職の受け入れをしたり実際に現地に出向いて現地の方と一緒に研修を受けるといったものだった。またJICA研修とは別の留学制度で発展途上国の子どもたちへの看護を学ぶためにネパールなどの国へ行くことも分かった。それを知った瞬間、「この留学制度の権利は私が獲得してやる。」とワクワクした。世界の子どもたちが死亡してしまう原因は肺炎やマラリアがその多くを占めるが、その中には周産期の問題も少なくない。早産や合併症、分娩時の問題などである。そんな状況であるにも関わらず看護の実態は劣悪なのだという。私は貧しい国々の子どもにも高度な知識と看護を提供して、そのような問題を少しでも解消したいと考えている。現在アフリカでの子どもの死亡率は年々減少の傾向にある。そこには日本人の活躍もある。

私は将来、そのような人たちの仲間入りをして発展途上国の現場で活躍できる看護師になりたい。そしてその経験を日本に持ち帰り医療の現場で生かしたいと思う。また、発展途上国における医療の現状をもっと多くの日本人に知ってもらいたい。一人分のワクチンはたったの百円である。この事実を知った瞬間、自分の中で何かを変えてくれる人は大勢いるのではないだろうか。

いつかわたしも貧しい人々の役に立つ存在になることを誓って、このエッセイの最後としたい。



essay

私の目標は医者になることだ。代々医者の家系であり、父の姿を身近に目にしているかだろうか、自然になりたいと思うようになった。

昨年、県教育委員会主催の留学フェアに参加し、国境なき医師団の日本人医師の方から、現地での話を伺った。若い女性が死にそうになったとき、現地の方は無理に延命治療をしようとせず、“good ideas her”つまり神様が彼女をお導きになっている、といったのだそうだった。また、病気になるっても保健センターや正規の病院を頼らず、安さから、市場で売られている衛生的でないハーブを使った治療や、祈祷による治療を行ったため、さらに病が悪化するという事実も絶えないのだという。どれも身近すぎる死生観や、科学よりも宗教や民間療法が重んじられていることの表れのように思える。

中学生の時、鹿児島市の国際交流事業で東南アジアのイスラム圏の国々を訪問した。少ない知識しか持っていなかった私は、歯磨き粉やミネラルウォーターに至るまで、ハラルマーク（戒律に則り製造された、イスラム教徒にとって口にしてもよいことを示すマーク）が付いている、時間きつちに祈禱を行うなど、宗教が隅々まで浸透した日常に圧倒されるばかりだった。帰国し、留学フェアでの話もあり、宗教と医療の結びつきについて興味を持つようになった。

イスラム教徒の女性は基本家族以外の男性に肌を見せてはいけない、病院での診察ではどうするのだろうか。情報収集するうちに、極端なケースではあるものの、錠を守るために医療機関を受診しなかった妊婦が、死亡、流産するという事件を知った。また、そんな事態を重く受け止め、せめて日本に訪れるイスラム旅行者に快適な医療環境を提供しようと、受け入れる体制を作りつつある病院も多数あることを知った。しかし身近に、父の勤務する病院でもまだ十分に整った環境があるとは言い難い。二〇二〇年には東京オリンピックも開催される。彼らの立場に立って、整備を進めていくことが「おもてなし」の第一段階であろう。私も将来医師になり、女性としての立場で活動に加わりたい。

言語や文化、人種などの様々な壁があるからこそ、私たちは苦勞、努力しなければならぬが、そんな多様性があるからこそ新鮮な出会いに驚かされたり、多様性の中の共通性を見出し感動させられたりする。国際交流事業でのホームステイ先の女の子が、なんと現地でそろばんを練習していた。私も小学生のころから教室に通っていて、計算力も集中力も身につけられる素晴らしいものだと思っている。しかし日本でさえ、そろばんは時代遅れ、流行遅れと言われたことがある。全く異なる文化の中に、同じ景色、黙々と練習に打ち込む女の子の姿を見たとき、初めての海外で若干ホームシック気味だった私は、国境を超えても通じるものをひしひしと実感し、喜びがこみ上げてきた。もっと共通の喜びを発掘したい、そんな思いが英語の勉強の原動力ともなった。

お正月には神社とお寺にお参りし、クリスマスもハロウィンも楽しむ私たちには到底想像できないが、イスラム教徒の彼らにとつて、戒律は揺るぎない生活の基盤のようなものだ。病気で苦しむことより、錠を破ることの方が辛い人もいる。宗教より科学を良しとし、それを無理やり押し付けるのではなく、相手の事をよく理解しこちら側が対応する。互いに尊重し合うこと。めまぐるしくグローバル化が進む世の中で、そんな謙虚な姿勢がますます大切になってくるように思える。

バングラデシュの少女に向けて

高校生の部 国際協力特別賞（本部表彰対象） 福岡県／福岡県立修猷館高等学校 ラワンチャイクン 茉莉さん



essay

Who made my clothes? 「私の服は誰が作ったの?」。ブランドの話ではない。今あなたが着ているその制服は、スーツは、Tシャツは一体“誰が”作ったのか。日本のほとんどの高校生は、自分たちの衣服の由来に興味を示さない。それがいかに好みか安いかだけを見て、それが作られている国や作る人々にまで想いをはせることはないのである。

たとえば服のタグを見てみると、中国やインド、ベトナムなど、そのほとんどがアジアの発展途上国で生産されているのが分かる。世界中のブランドが、その人件費の安さと豊富な労働力に依存しているのだ。中でもアジアで最も縫製工場が集中している国は、バングラデシュだ。アジアの最貧国の一つであり、「世界の縫製工場」とも呼ばれる。

そのバングラデシュの首都ダッカ近郊のシャバルで、二〇一三年四月二十四日、死者千二百二十七人、負傷者二千五百人以上を出した「ダッカ近郊ビル崩壊事故」が起こった。オーナーによる違法建築と、工場の大型発電機と数千台のミシンによる振動が縫製工場の崩壊を誘発したのだ。しかし明らかになった問題は、これだけではなかった。当時の従業員の賃金は、バングラデシュの標準生活費の四分の一にも満たなかったことや、その多くが女性であるのに、産休が認められず、仕事中はトイレにも行けないような、劣悪な環境で働いていたことも明らかになったのだ。

なぜそうも過酷な条件下で、彼女たちは働かなければならないのか。それは、貧困だからだけでなく、他ならぬ日本や欧米の低価格でグローバル展開するブランドが、バングラデシュの劣悪な労働環境や安価な労働力に依存して、利益を追求しているからでもある。

バングラデシュの女性労働者は三千万人。全労働人口の約四十%を占める。そして五歳から十七歳までの児童労働者は、インドに次ぐ五百万人である。しかし最近では低年齢化が進み、国際労働機関もその数を把握しきれていないのが現状だ。私は愕然とした。「ダッカ近郊ビル公開事故」では、一体何人の少女が犠牲になったのだろうか。事故で母親を亡くし、自身も重い傷を一生背負うことになった、写真の幼い少女の姿が忘れられない。さらに、バングラデシュでは児童労働者の五人に一人が十歳以下だという。十歳といえば、私は小学四年生で、明日の生活の心配もせず生きていた。一方、本来学校にいるべき彼らは、朝から晩まで向上や道端で身を粉にして働いている。経済発展を遂げる日本の私たちの生活が、決して当たり前ではない過酷な日常が、バングラデシュにはあるのだ。

では、劣悪な条件下で働く女性や児童をめぐる問題は、寄付などの金銭的な支援で解決するのか。いや、それでは解決しない。富裕層との間の激しい格差をなくすことが、本当に目指す目的地ではないだろうか。

事故から四ヶ月、日本のブランドの一つ、ユニクロは「バングラデシュにおける火災予防および建設物の安全に関わる協定」に署名した。国際的な水準には程遠いが、今回の事故を受けて、日本のブランドも少しずつ取り組みを始めている。では、高校生の私たちには何が出来るだろうか。

Who made my clothes? とは、今回の事故をきっかけに誕生した団体、ファッション・レポリユーシジョンの言葉である。ほとんどの高校生は普通、自分たちに直接関係のない発展途上国の出来事に関心が薄い。しかし、「私たちの着ている服は、どこで、誰が作ったのだろうか? 子どもが苦しんだり、環境を汚染したりしていないだろうか?」と考えてみると、その国との繋がりが見えてくる。

私たちに出来ることは、ファッション産業のゆがんだ構造を想像して見ること、その問題に関心を持つこと。そのことをやめてはいけぬ。「I made your clothes.」と笑顔で返ってくるまで。



essay

二年前、私は学校の海外研修でバングラデシュを訪れた。飛行機から降り、長旅で疲れた体を引きずって空港の中を歩いていると、驚くべき光景を目にした。一匹の猫が歩いていたのである。突然の異国感に自然と笑みもれ、胸が高鳴った。空港から出るとクラクションの嵐だった。渋滞の車の間を縫うようにリキシャという派手な人力車が走っていく。見るもの全てが初めてで、においも音も初めてで、私はずっと車内から外を見ていた。肌で感じる異国感は、私に、ここにしかない地域性を強く感じさせた。

二日目、私はガタガタ揺れる飛行機でジェソールへ向かった。アジアヒ素ネットワークが行っているヒ素公害対策事業について学ぶためだ。宮崎県の土呂久鉾山で起ったヒ素公害を教訓に、アジア各国のヒ素公害をなくす目的で結成されたこの団体は、今ではヒ素以外のさまざまな支援も行っている。中でも私が興味を持ったのは、NCプロジェクトと呼ばれる事業だ。これは生活習慣病のリスクを減らすことを目的とした事業だ。私は、発展途上国であるバングラデシュに生活習慣病があることに驚いた。決して裕福とはいえない生活を送る彼らが、なぜ生活習慣病にかかるのか、その原因は、この国に根ざす食文化にあるという。私は、それまで自分が心を躍らせていた地域性がこの国の人々を苦しめているということを受け入れ難く思った。

しかし、現地で食事をすると、それは明白だった。昼食の時間、私の前に置かれたのはインディカ米の山と、カレーだった。野菜はない。現地スタッフはこのパラパラのお米に、さらさらしたカレーをかけて手で混ぜながらもりもりとおいしそうに食べる。私も彼らをまねて食べてみた。初めての味と食感にとまどう私をよそに、インディカ米の山は現地スタッフにより崩され、あつという間に平らな皿だけが残った。その後、私は現地の学校を訪れた。ここでは、ミスティというお菓子が出された。口に入れて、思わず一緒に来ていた友人と顔を見合わせた。甘い、とにかく甘いのだ。食べると舌のつけ根がきゅつとなつてざわざわと鳥肌が立つほどだ。あわてて紅茶を飲んだ。が、この紅茶も甘い。スプーンで混ぜるとカップの底で溶け残った砂糖のざらざらとした感触があった。この地域に根ざす糖質を多く摂取する食文化こそがバングラデシュで生活習慣病の多い一因であることを痛感した。

地域食が生活習慣病を引き起こしている。ならば、その地域食をなくすべきか。私が出した答えはノーだ。確かに、私にとってそれらが全ておいしかったとはいえない。しかしそれらは、私にバングラデシュという国を教えてくれた。食べ物に限らず、私は現地で見たもの、嗅いだにおい、聴いた音、全てがバングラデシュをつくっている。それを課題解決のためだけにないがしろにすることはその地域の個性を奪う悲しいことだと思う。文化を守ることと課題を解決することはどちらもゆずることのできない大切なことだ。

NCDDプロジェクトでも、文化を守りつつ健康な食生活を推進している。例えば、食事の内容は変えず、しきりのついた皿で量とバランスを適切なものにするということとを提案している。私はこの活動の考え方に強く共感し、いつかこのプロジェクトに参加することを約束してバングラデシュを後にした。

あれから二年、私は学校で地域食の研究を行った。私の周りの地域にも今にも消えそうな地域食がある。私はそれを受け継ぎ、守っていこうと思っている。

世界はグローバル化が進み、それとともに価値の単一化も進んでいる。人が場所や環境に左右されないのはとても便利なことだ。しかし、地域の文化や特色まで同じ色で塗りつぶしてはいないだろうか。私は、そんな世界中の地域らしい色を守れる人になりたい。

JICAは**地域の窓口**として国際協力推進員を配置しています。国際協力に関する教育現場の支援、各種団体との連携、青年海外協力隊に関するご相談などお気軽にご連絡ください。



contact

〒812-0025
福岡県福岡市博多区店屋町4-1
福岡市国際会館1F
電話番号：092-262-1714
ファックス：092-262-2700
ホームページ：
<http://www.rainbowfia.or.jp/>
Eメール：
jicadpd-desk-fukuokashi@jica.go.jp

〒840-0826
佐賀市白山2-1-12 佐賀商ビル1階
(公財) 佐賀県国際交流協会内
電話番号：0952-25-7921
ファックス：0952-26-2055
URL：
<http://www.spira.or.jp/>
Eメール：
jicadpd-desk-sagaken@jica.go.jp

〒850-0862
長崎市出島町2-11
出島交流会館1階
電話番号：095-823-3931
ファックス：095-822-1551
ホームページ：
<http://www.nia.or.jp/>
Eメール：
jicadpd-desk-nagasaki@jica.go.jp

〒860-0806
熊本県熊本市中央区花畑町4-18
熊本市国際交流会館内
電話番号：096-359-2130
ファックス：096-359-2130
ホームページ：
<http://www.kumamoto-if.or.jp/default.asp>
Eメール：
jicadpd-desk-kumamotoshi@jica.go.jp



JICAデスク福岡 担当: 森川



JICAデスク佐賀 担当: 和田



JICAデスク長崎 担当: 茂田



JICAデスク熊本 担当: 阿南

JICAは**地域の窓口**として国際協力推進員を配置しています。国際協力に関する教育現場の支援、各種団体との連携、青年海外協力隊に関するご相談などお気軽にご連絡ください。



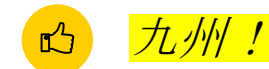
contact

〒870-0029
大分市高砂町2-33
iichiko総合文化センター
電話番号：097-533-4021
ファックス：097-533-4052
ホームページ：
<http://www.oitaplaza.jp/japanese/>
Eメール：
jicadpd-desk-oitaken@jica.go.jp

〒880-0805
宮崎市橋通東4-8-1
かりーノ宮崎9F 宮崎県国際プラザ内
電話番号：0985-32-8457
ファックス：0985-32-8512
ホームページ：
<http://www.mif.or.jp/japanese/>
Eメール：
jicadpd-desk-miyazakiken@jica.go.jp

〒892-0816
鹿児島市山下町14-50
かごしま県民交流センター1F
電話番号：099-221-6624（直通）
ファックス：099-221-6643
ホームページ：
<http://www.synapse.ne.jp/kia/>
Eメール：
jicadpd-desk-kagoshimaken@jica.go.jp

〒805-8505
福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1
九州国際センター（JICA九州）
電話番号
093-671-6311（代表）
ホームページ：
<https://www.jica.go.jp/kyushu/>
開発教育支援事業へのご相談は、
市民参加協力課まで。



JICAデスク大分 担当:佐保



JICAデスク宮崎 担当:田代



JICAデスク鹿児島 担当:_____



JICA九州 担当:市民参加協力課